

Sunny Day Love Farm

『ツンデレ少女と農業をやるハメになった！？』

秋穂らら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sunny Day Love Farm 『ツンデレ少女と農業をやるハメになった!?!』

【Nコード】

N3534BA

【作者名】

秋穂らら

【あらすじ】

農家の長男でありながら農業が大嫌いな高校生、阿賀野京一。

彼は親から立派な畑を預けられたのだが元々やる気もなく、その畑は草ぼうぼうの荒地へと姿を変えてしまう。

この荒地が立派な畑に戻る事は永遠にないだろう、と完全に放置を決め込んでいた京一だったのだが、そんな彼の目の前に謎の少女が現れる。

彼女はその荒地を指差して、

「この荒地を立派な畑にしてみせる！」
とか言い出すもんだからさあ大変！

頑張れ京一！ 彼女の野望を食い止めろ！

プロローグ（前書き）

プロローグ

照りつく太陽の下でまじめに農作業するという事に、なかなか慣れない自分がいた。

空に向かって力強く伸びる野菜の芽を見つめながらそう思う。

「まだ半分も行っていないな……」

俺は芽を出したばかりの小さな野菜たちに水やりをやっていた。

これも彼女達の命令なのだが、どうにもこうにも面倒事を押し付けられているような気がしてならない。

空っぽになったジョウロを地面に置いて、俺はゆっくりと地面の上へと腰をつく。

すぐ近くに水道やら井戸水でもあればまだ楽なのだが、水を汲む手段として残されているのは近くの用水路に行く事だけ。そこまで遠い訳でもないのだが、何度も往復しているといい加減嫌になってくる。

「こらっ、そんなトコでサボってちゃだめでしょ？」

少し離れた所から聞こえる声の方に向かって視線を向ける。

そこではコンビニで買ったサンドイッチを頬張りながら、楽しそうに談笑する少女が三人ほど見える。

「俺にはお前の方がよっぽどサボってるように見えるんだけどね……」

がつくりと頂垂れながらジョウロへと手を伸ばし、落ち込む気持ちを抑えて近くの用水路に向かって歩き出した。

「一体どうしてアイツらと農業をやるハメになったんだかなあ……」

事の発端は入学式の日。

あの日あの場所で彼女と会わなければ、こんな事にはなっていない
かっただろう。

農業なんて大嫌い！

入学式当日の朝。

カーテンの隙間から溢れる太陽の光で俺は目を覚ました。

寝起きのダルい体を起こしながら壁に掛けられた時計へと視線を移す。学校へ行く時間までかなり時間はある。しかし、一度起きてしまつとなかなか寝付けない体質なので、時間が余るのを承知で洗面所へと向かった。

その途中、必ず台所の前を通らなくてはいけないのだが、出来る限りそっちの方向は見ないようにするつもりだった。

それでも、やはり思った通りにはいかない。

「……何だ、今日はもう起きたのか」

その言葉の方へと振り向く。

台所のテーブルの前に座り、厳格な態度で新聞を読んでいる父の姿。

俺が台所の前を通りたくない理由はいいつにあつた。

職業、農家。日々の時間を楽しむ趣味や特技など持ち合わせておらず、ただただ熱心に農作業へと打ち込む事を生きがいに行っているのが俺の父だった。

そして、そんな父を持つ俺はこの家の跡継ぎという立場にある。それがどうしても納得いかなかった。

生まれた瞬間から、その家族の元で生を受けた時から、俺の運命は決めつけられていた。

そこに居合わせた誰しもが、俺の事を農家の後継ぎとして、立派な男に育つ事を信じて疑わなかった。

勝手な期待を押し付けられ、自らの人生の行き先を自由に決める事さえ出来ない。

そんな下らない人生はまっぴらだった。俺の人生は俺のものだ。どう生きようが、どうなるうが、それは全て自分で決める事。だからこそ、俺は父と母が入学を勧めていた農業系の高校には入らず、反対を押し切って普通科の高校へと進学した。

今日はその入学式の日。決められたレールから外れた、自分で選ぶ事の出来た未来。制服に袖を通すのが楽しみで仕方がなかった。そんな輝かしき門出の朝に、父と話す事になるのは出来れば避けたい。

しかし、こう話し掛けてしまわれたら無視するわけにもいかないだろう。

「ああ、そうだよ。今日は入学式だからな」

そう返答するのだが、父は不機嫌そうに鼻を鳴らし、新聞へと視線を戻した。

機嫌が悪くなるのなら、わざわざ話し掛けなければいいのに。それにそんな態度を見せられれば、こっちだって嫌な気分になるのは当然の事だ。

この様子じゃ入学式も見には来ないだろう。不機嫌なまま一人で畑仕事にでも向かうに違いない。そいつは大いに結構な事だ。イライラしながら入学式に来れば、他の人の迷惑にもなるだろうしな。

俺はそのまま洗面所へと向かい顔を洗った。蛇口から流れ出る冷たい水が、先程の嫌な気分を忘れさせてくれる、そんな気がした。洗面所を出ると父と母がテーブルに座りながら、朝食を食べているようだった。しかし、俺はテーブルに並べられた人数分の朝食を無視して、そのまま部屋へと向かう。

一緒に朝食を取れば何か言われそうで、出来ればそんな事も考え

たくなかった。

部屋に戻って俺はもう一度ベッドに横たわる。家族と一緒にいると、どうしても憂鬱な方に気分が傾いていく。それはそうだろう、誰一人として俺のやっている事を肯定してくれる人などいないのだから。

「……まだまだ時間あるな」

壁掛け時計を見ながらそう一言。

早く起きてしまったせいで時間は余りに余っている。だからといって、部屋ですつとごろごろしているのも退屈で仕方がない。

「あー、くっそ……!!」

俺はベッドから飛び起きて、綺麗に畳んであった制服へと手を伸ばした。

こうやって家にいれば気分が何処までも落ちて行つて、入学式という晴れの舞台に最悪のテンションで参加する事になってしまいうだ。

着慣れない新しい制服に袖を通して、通学カバンへと手を伸ばす。もう時間が余っているだとか、そんなものはお構いなしだった。

俺は早足で玄関へと向かい、靴箱に片付けてあった靴を履く。

そして『いつてきます』だとか何の言葉もなしに、急いで家から出ていった。

外では雲ひとつない青空が俺の事を迎えてくれたのだが、優れない気分ではそんな晴天にも苛立ちを覚えてしまう。

「はあ……全くもって最悪の門出だよ」

ようやく自分の意思で踏み出せた一歩、それは俺にとって希望に

満ち溢れているもののはずだ。しかし、朝っぱらから父のあんな態度を見せられてしまつては、そんな希望を抱く事なんて出来やしない。

「気分を取り直すがてら、とりあえず学校にでも向かうか」

学校に着いても俺以外の新入生なんて、人っ子一人いなさそうな気はするけれど……。

ため息を混じえながら、俺は学校へと続く通学路を進んでいった。その途中でとあるものに目が止まる。

それは家と家の間に挟まれた、見るも無残な荒地だった。そこには埋め尽くすように雑草が生え、新築が並ぶ住宅街には似合わない、不格好で仕方がないものだった。

「そついや、このルートだとここを通る事になつちやうのか……」

この場所は元々立派な農地だった。少なくとも数年前はここに新築の家なんて並んではいなかったし、どこまでも続きそうな広大な農地が広がっていた。

しかし、町の事業か何かでここ最近、この辺りは新築住居が並ぶ住宅街へと姿を変えた。

それでも、何故だかこの場所だけは何の変化もなく、ずっとこの場にあり続けている。

「いや……違うよな。何の変化もないなんて戯言だ。昔とはまるつきり違うじゃないか」

小さい頃、父と共によくここに遊びに来ていた。

草むしりを手伝いに、立派に実った野菜を収穫しに、秋が終わった頃にはここでキャッチボールをして父と遊んでいた。

そして父は俺が大きくなって、立派な農家の跡継ぎになってもらう為に、この場所を俺に預けた。ここで野菜を作って、農家になる為の一通りの知識を付けさせる為に、この土地を俺へと託した。しかし、父の思うようにはならなかった。

いつからだっただろうか、父の意思に反抗し始めたのは。一体いつから、立派な畑はこんな見るも無残な姿へと変わってしまったのだろうか……。

「……何もかも親父が悪いんだ」

そうだ、全ては父が悪い。要らない期待を押し付けて、それがこいう形として結果に現れる。こんな事になるのなら、最初から業者がこの場所も売り渡してしまえばいいのに。

「……はあ、ダメだ。何か朝から余計な事ばかり考えてるぞ、俺」

父と母の顔が見たくないから、わざわざ早く家から出てきたっていうのに……。

こんな事ばかり考えていたら、家にいるのと何も変わらないじゃないか。

俺は大きく深呼吸をして、通学路の方へと視線を移した。

帰りはもつと別の道を通ろう。毎回この場所を通っていたら、いらない事を考えてしまってテンションがガタ落ちしてしまいそうだな。まあ通学時間も少しばかり延びてしまっただろうけど、それも仕方な――

「――ねえ、キミ。一体ここで何してる訳？」

その言葉に思考が遮られる。訳の分からない問いかけに、俺は自然と振り向いていた。

「……は？」

そこにいたのは歳が俺と同じ位の、制服を着た少女だった。

真紅に染まったツインテールを風になびかせ、透き通った藍色の瞳でこちらを見つめている。肌は健康的な色合いで、太陽の日差しがその美しさをより一層際立たせていた。

それだけ見れば可愛らしい少女だった。見ただけならば、一目惚れしたっておかしくはないレベルだった。しかし、両腕を組み鋭い視線でこちらを睨みつけているせいかな、そんな気は一切起きてこない。

彼女の様子が随分と威圧的だったので、ついつい俺も竦んでしまっていた。

「だから聞いてるでしょ？ この場所で何をしてるのかって」

「な、何だよ。お前。そ、それはこっちの台詞だつつの」

「はあ？ それが初対面の相手への態度？」

何言ってるんだ、それは全部自分に当てはまる話だろ！ とツッコミを入れてやろうと思ったが、彼女の放つ圧倒的な威圧感に押されてそんな言葉は口から出てきはしない。

「……うぐつ。な、何もしてねえよ。ただここに突っ立ってただけだ」

「ふうん。何だ……つまんないの」

俺の言葉が理想と違ったのか、彼女は退屈そうに息をついた。

「あたしみたいにな、この場所に興味があると思ったのに。何だ、意味もなく立ってただけなんだ」

「あ、ああ、そうだよ。何か悪いかよ」

「別に、何も悪くなんてないわ。ただつまんないって思っただけ」

言いながら彼女は草ぼうぼうの荒地の方へと視線を移した。
しばらくの沈黙の後、彼女はゆっくりと口を開く。

「ねえ、キミさ。この場所見てどう思う？」

荒れ果てた土地を見て何を思うかだなんて、なかなか訳の分からない質問をしてくれる。

「……住宅街に似合わない、不格好な場所じゃないか。さつさと埋め立ててここにも新しい家を建てたらいいのに、って心の底から思うね」

「まあそうよね、普通だったらそう思うわよね。あたしもここがどんな場所だったかを知らなかったら、きっと同じ事を思うわ」

こいつは一体何を言っているのだろうか。まるでこの一帯が広大な農地であつたのを知っているような、そんな態度で彼女は話をしている。

しかし、それはどうにもおかしい話だった。俺は彼女の顔に一切の覚えがない。

彼女が地元の人間で俺と歳が同じくらいなら、小学校や中学校も一緒だという事になる。ならば少なからず学校で会っているはずだし、面識が一切ないなんて事は有り得ない。

だから、彼女がこの場所が農地だった事なんて知っているはずもないのだ。

それでも、その考えに反して彼女は言葉を続けた。

「ここ一帯は立派な畑だったの。食べた瞬間にもう忘れられなくなるくらい美味しい野菜がいっぱい獲れて、そんな野菜が何処までも続いているようなすごい場所だったの——」

心臓が締め付けられたような感覚だった。

彼女の言葉の一つ一つが、俺に重くのしかかる。

「——きつと、何かの理由で『あの人』はこの場所を手放したんだわ。それから何もかもが変わってしまった。だから許せないの、あの人が大切にしてきたこの場所を……この畑をめちやくちやにした奴が許せない」

俺は彼女の言葉に息を呑んだ。

「——あたしはこの場所を昔みたいな立派な畑にしてみせる」

それは信念を感じられる、力強い一言だった。

俺は何も言い返す事は出来ず、彼女の姿を見つめている事しかできない。

「……ともかくよ、キミが地元の間人だっというなら見てなさい。近い内にここは立派な畑になるんだから。その時はしっかりと覚悟しておくのよ」

言いながら彼女は俺の横を通り過ぎ、そのまま何処かに向かって歩いていった。

振り向く事も出来ず、俺はただただ一言呟く。

「覚悟しとけて、一体何を覚悟したらいいんだよ。こんちくしよ
う……」

彼女の一言一言が的確に、俺へと突き刺さっていた。普通だったら彼女の言葉なんて『電波女が何か言っている』程度で終わる話のはずだ。しかし、俺の場合はそうじゃない。

彼女の言う立派な畑を荒地へと変えた人物。その張本人が俺なのだから、彼女の言葉を気にしないなんて事出来る訳がなかった。

「……ダメだ、考えれば考える程……頭の中がこんがらがっていく」俺は大きいため息をつきながら、腕時計を見つめる。

学校に向かうのには丁度良い時間になっていた。

「……考えたって埒があかない。学校……行くか」

春の風が桜の花びらを散らす。

俺はその風に吹かれながら、重い足取りで学校へと向かって歩き始めた。

絶望の門出

俺は人集りの出来た生徒玄関の前で、どうしたらいいのかよく分からずその場に立っていた。

中学の入学式とは全く違う、新入生の数の多さにぼう然とする他ない。

「おいおい……いくら何でも多すぎやしないか？」

生徒玄関の前に出来た人集り。原因はそのすぐ近くにある大きな張り紙にあるらしい。

自分のクラスが書かれたその張り紙を見ながら、歓声を上げる者や何処か淋しげな表情を浮かべる者。多分、出身校の同じ奴らが騒いでいるに違いない。

人混みをかき分けて、俺はクラスが書かれた大きな紙の前へと何とか辿り着く。

「……一年三組か。一体どんな面子が揃ってるのか楽しみだな」

俺の知り合いのほとんどが違う学校へと進学してしまった。小学校からの悪友もおらず、この学校に友人と言える人物は全くいない。だからこそ楽しみだった。新しい友だちが増える、そう考えただけで気持ちが明るい方へと向かっていく。

俺は急いで新入生が集まる教室へと向かった。どんな出会いが待っているのかと、色々な期待を込めて教室の扉へと手を伸ばした。しかし、最初に瞳に飛び込んできたのは意外な人物だった。何処か見覚えのある女性が不機嫌そうに立っている。

「あれ——何でお前が、ここに……いるんだよ？」

その言葉に彼女は振り向いた。

朝出会った、赤髪ツインテールの女が目の前にいる。相も変わらず威圧的な態度でこちらを睨みつけ、今朝と同じ馴染めなさそうな雰囲気放っていた。

「……あれ、キミは朝の人か。キミこそ何でこの学校にいる訳？」
「な、何でって……俺がこの学校の新生だからだろ」

俺がそう言うと、彼女は急に俺のすぐ眼前まで近づき、襟元に付けられた校章に手を伸ばした。

「あれ……ホントだ。これうちの高校の校章じゃない」

そう言いながら俺を見上げる彼女の顔が、今にも俺の顔とぶつかってしまいそうだった。

普通だったならそんな状況になってしまえば、恥ずかしさですぐに顔を離すだとか、せめて照れたりしてくれたら可愛らしいのに、そんな態度も見せる事もなく彼女はじつと俺を見つめ続ける。

「……な、何だよ。も、文句でもあるのかよ？」

強気にそう言い返したつもりだった。しかし、あまりにも彼女との距離が近すぎるせいで、恥ずかしさから俺の頬は真っ赤に染まっていた。

それに気が付いたのか、彼女は一步だけ後ろに下がったと思うと

「——何？ 風邪でも引いてんの？」

言いながら彼女は、あろうことが俺の額に手を当てた。

「――っ!？」

あまりの恥ずかしさに泡を吹いてしまいそうだった。おまけに最初から俺とこいつの会話はクラスの集中の的へとなっていたのか、教室中の至る所から囁き声が聞こえてくるのが分かる。

『おいおい、入学初日から何やってんだよ、あいつら』

『ていうか女の方が愛くね？　なんであんなヤツと……』

『ええ〜？　何々どうしたの？』

そんな声が聞こえてきたので、俺は咄嗟に彼女との距離を取った。

「お、お前何なんだよ！　は、恥ずかしくねえのかよ!？」

「恥ずかしいっていうか、ただ校章確認しただけだし。それに顔が真っ赤だったから風邪でも引いてるのかな、って思っただけなんだけど」

周りからあれだけ言われたにも関わらず、彼女は何の態度の変化も見せはしなかった。

鋼の精神力を持つているなのか、それとも頭のネジが一本か二本吹き飛んでいるだけなのか、とにもかくにもこんな性格の奴に出会った事なんて生まれてこの方一度もない。

入学初日から、人生の新たな第一歩から、俺はとんでもない地雷を踏みつけたんじゃないだろうか？

「何騒いんでんだ〜？　入学式の説明するからお前ら席に付け〜」

振り向くと、メガネを掛けた『如何にも』といった姿の教師が教

室へと入ってくる。

ざわざわと賑わっていた教室の中が、教師の一言でぴたりと静かになった。

生徒のほとんどが自分の席に座っていく中、俺はぼう然とその場に立ち尽くしていた。

（しまった……自分の席が何処だか確認するの忘れた……）

さっきの彼女との会話のせいで、黒板に貼られた席順の紙の事などすっかり目に入らず、何処に座ったら良いかなんてさっぱり分からなかった。

しかし、こういうピンチな時に俺の頭はよく回る。クラスの全員が席に座ったとなれば、誰も座ってない席が自分の席になる。それに気付いた俺は急いで教室の中を見回した。

「……って、あれ？」

扉のすぐ目の前の席、最前列の場所が空いている。

そしてそのすぐ隣の席に座る人物。如何にも嫌そうな表情を浮かべる彼女がそこにいた。

「何だ……キミが阿賀野京一くんだったんだ……」

現実に絶望した。今すぐにも逃げ帰りたくなった。

何故ならさっきの赤髪ツインテールが俺の隣の席だったのだから

居ても立つてもいられなくなつて

人生で僅か一回しかない高校の入学式。本来なら思い出に残るはずの、俺にとつての数少ない晴れ舞台。俺もそんな一大イベントの主役の一人であつたはずなのに、頭の中には入学式の記憶なんてこれっぽちも残つてはいなかった。

あつという間に始まつて、気付かない内に終わつてしまつていた我が入学式。

クラスの記念撮影も、学校に入ってから初めてのホームルームも、ホームルームが終わつて一段落ついた後のメルアド交換タイムすらも、何一つ楽しめる事はなく既に下校時間を迎えようとしていた。

全ての原因は隣の席にいる赤髪ツインテール、姫月二葉ひめつきふたばにあつた。ホームルームの自己紹介でその名前を知つたのだが、奴は東京の方からわざわざ引越してこの学校に入学したらしい。

そんな都会育ちの都会っ子が、どうしてあの荒地が立派な畑であつた事を知っていたのか、考えれば考える程、俺の頭はパンク寸前な状態へと陥つてしまう。

入学式の時だつてあいつが気になつて仕方がなくて、全く集中する事なんて出来なかつた。更に追い打ちを掛けるように行われたホームルームでの自己紹介。その内容は先程説明したばかりだが、おかげさまで俺は完全に力尽き、机に突つ伏している限りである。

「……ねえ、キミさ。さっきからずっと何を一人でぶつぶつ言つてる訳？」

俺はその声で俯けていた顔をゆっくりと上げた。

ばやけた視線の先にいる人物、目を疑いたくなる程に綺麗で可愛いらしい少女の姿。しかし、その容姿がいくら天使のように見えたと

しても、俺にとって彼女は悪魔そのものだった。

「ああ……大魔王様の登場かよ」

絶望に打ちひしがれている俺に、更に追い打ちを掛けるように現れた大魔王。そいつは力なくうな垂れる俺を見ながら、大きくため息をついた。

「はあ……？ 遂に頭でもおかしくなった？」

「俺は至って正常だ。今の俺にはお前さんが魔王とか悪魔にしか見えねえよ」

「魔王に悪魔ねえ。知り合って間もない相手に言うセリフかな、それ」

言いながら彼女は不機嫌そうに腕を組む。

「そうやって訳のわからない事を言ってるのはいいけど、今教室に残ってるのキミとあたしだけだから」

「はい？」

俺はその言葉で教室の中を見回すが、確かに彼女の言う通り、教室はもぬけの殻だった。俺と姫月二葉以外の姿は何処にもない。

どうやら俺がノックダウンされている間に、周りの連中は下校してしまっただけらしい。しかし、どうしてこいつだけが教室に残っているのだろうか。

「ま、また俺に何か用があるのか？」

今朝の事だつてある。また何か変な企みでもしているに違いない。そう思って聞いた事だったのだが、案外普通の答えが返ってきて拍子抜けしてしまう。

「別に。独り言呟いてたから、単に眠っていて寝言でも言ってるのかな、って思っただけ」

「……何だ、それだけかよ」

俺はそう言いながら、また力を失ったように机へと突っ伏した。俺がこうなってしまうっているのも、全てはこいつが元凶なのだ。俺の荒地を立派な畑にしてみせるとか言ったり、急に顔を近づけてきて仕舞いには額に手を当ててみたり……。

「はあ……とんでもない第一歩だな」

入学初日からこいつには振り回されてばかりだ。これが毎日続くようなら、正直耐えられる気がしない。それくらい俺は豆腐メンタルな人間なんだ。出来ればそっと眺めているだけにして欲しいのが本音だった。

「さてと、そろそろいい時間かな」

姫月二葉は腕時計を見つめながらそう呟く。

俺もつられて教室の壁に掛けられた時計を見つめるが、時計の針は二時を指していた。

新入生の本日の日程は午前中で終わっているはずなので、こうやって学校に残り続ける必要は何処にもない。

そっぴや、どうして姫月二葉は教室に残っていたのだろうか。現実から逃避していた俺の事はさておいて、こいつがここに残っている理由なんて思い浮かばない。

「なあ、どうしてこんな時間まで教室に残ってるんだ？ やる事でもあるのか？」

「やる事なんて全然別にないけど。ここで時間を潰してただけ」

言いながら彼女は机に引っ掛けてあつた鞆に手を伸ばす。

「入学式って言ったら、帰る時に部活の勧誘されるでしょ？ それ
が嫌で勧誘活動が終わるまでずっと教室に残っていただけ」

なるほど。確かにこの高校は部活動に非常に熱心だと聞いた事がある。学校の掲示板に各部活のチラシが埋め尽くされる程に貼つてあつたし、普通の時間に帰ろうものなら、各部活の勧誘活動に捕まってしまうだろう。

「……でもさ、嫌なら嫌で断っちゃったらいいだろ？」

まあ高校生活という青春を、部活で謳歌するのも悪くはないとは思うが。

「そうはいかないんだよね。あたしってさ、頼まれたりすると断れない性格なんだ。だから出来るだけ勧誘の人とかには会わないようにしてるの。それ以外にも一応理由はあるんだけどね」

誘われたら断れない性格って……全然そんな風に見えないのは気のせいだろうか？

もう一つの理由というのも気にはなるが、あまり深入りしないのが正解だろう。これ以上こいつと関わるのは御免こうむりたい。

とりあえず、俺もいつまでも教室に残っている訳にも行かない。まだ終わってないゲームもあつたし、今日は家に帰ってそれで時間を潰していよう。

俺も鞆に手を伸ばして、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「……んじゃ、俺は先に失礼するからな」

そう言い残して、彼女と視線を合わせないように教室を後にする。そして長い廊下を進み、階段を降り、生徒用玄関まで真っ直ぐに進んでいく。そして下駄箱に手を伸ばしたところで、俺は大きくため息をついた。

「……どうしてお前も付いて来るんだよ？」

そう言いながら俺は隣にいる人物の方へと視線を向ける。

「……？ 別に。キミに付いて来たつもりなんて更々ないけど」

姫月二葉は靴を履き替えながら、素っ気もなくそう答えた。

「いや、でも、何かよくよく考えたら朝からずっと一緒に訳だし……」

「それは偶然。朝に会ったのも、クラスが一緒だったのも、こうして帰る時間が同じになったのも、全部たまたまよ」

「……ふう、なるほど」

意図がなく、ただ自然と振舞っていた結果こうなった。別に俺に對して何か用がある訳でもなく、興味があつた訳でもない。そういう事ならば、今の状況に對して素直に安心する事が出来る。

てつきり彼女に何かしら目を付けられたのかと思つたのだが、どうやらその心配は杞憂だったようだ。彼女は俺を置いてそのまま外へと出ていった。

その後姿を見つめながら、そつと胸を撫で下ろす。

朝から下校の時間まで、何だかんだ言つて結局は一日中彼女に振り回されたような気がする。何故だか彼女と一緒にいると、相手の威圧的な雰囲気の原因なのかひどく疲れてしまう。

「顔はすごく可愛いんだけど……」

鋭い目付きとあの態度さえどうかすれば、学校中の男子からラブコールが送られるに違いない。実際、姫月二葉が温和で優しい性格であつたなら、俺もその一員になっていた事だろう。

「さつてと、家帰るか」

学校も終わつた事だし、気持ちを切り替えていこうじゃないか。色々散々な一日だったかもしれないが、苦難なくして壁は乗り越えられない。この先何があろうと、全部まとめてぶっ飛ばしてしまえばな問題ない。そういう意気込みでやっていかなくては。

玄関から見える桜の木々を見つめながら外へと歩き出す。

学校のすぐ目の前にあるコンビニで軽く買い物をして、俺も帰路へとついた。

そしてしばらく歩いて、俺はある事に気が付いた。

「……げ、こつちつて朝通つたルートじゃん」

そういえばそうだった。この道を通れば俺がずっと放置し続けてきたあの畑がある。

畑なんて無視してしまえばいいのだが、ついつい気になってしまふのは間違いない。

「と言つても……今更道を引き返すのモナ」

この道は家から学校までの距離が一番近い。畑さえ通り過ぎてしまえば、後は何も悪い所なんてなく自分の家はすぐそこにある。

仕方ない、今日これっきりだ。明日からは通学路をしっかりと変更して、あの畑を見るのは今日でお終いにしよう。

そう思つた俺はそのまま真っ直ぐ歩いていった。

いくら心の準備をしていたとしても、畑が近づくにつれて憂鬱な

気分へとなっていく。

出来る限り見ないように、出来れば完全に無視すれば良かったのに――

「――相変わらず、殺伐としてるよな。ここ」

結局は雑草が生い茂った畑の前で、俺は立ち止まっていた。

未練でもあるのか、俺。いや……そんなものはないはずだ。心に決めたのだ、農家なんてやらないのだと、父の跡なんて継ぐつもりはないんだって――

「――つて、あれ？ 誰か……いる？」

目が止まった。ぼうぼうと生えた草の合間に、人の姿があった。藍色に染まった体操着を着て、せつせと草むしりをしているように見える。

何処かその姿に見覚えがあった。赤い髪のツインテールを揺らしながら、一生懸命に背の高い草を抜き取るうとするその姿――

「――姫月二葉？」

間違いない、彼女だった。

新品であるはずの体操着は所々が汚れて、真っ白で艶やかな肌にも泥が付いていた。それでも額に汗を浮かばせながら、彼女は必死に雑草を抜こうとしている。

「朝のあれは本気だったっていうのかよ……」

雑草が生い茂った無残な荒地を、元の立派な畑にしてみせるという彼女の言葉。

確かにあの力強い言葉からは、信念のようなものが感じ取れていた。

それでもたった一人で、あんな華奢な体だけで、埋め尽くすように生えた雑草をどうにかするだなんて事出来る訳がない。そんな訳はないのに――

いくら俺がそう思っても、彼女は覚束ない動きで草を抜き続ける。

そんな彼女を俺はじつと見つめていた。

俺には関係ない、あんな荒地がどうなるうとも知った事じゃない。そつだ、馬鹿馬鹿しい話なんだ。あんな動きじゃ半年経っても終わるはずがない。

今日だつて思ったじゃないか。これ以上あいつには関わらないようにするのが、俺にとっての正しい選択なんだと――

「……きゃあっ！」

草の向こうから彼女の声が聞こえた。その声から察するに、きつと何かに足を躓かせたのだろう。しかし、彼女は痛がる様子すら見せずに立ち上がり、また地面から伸びる雑草へと手を伸ばす。

「ああ……もう、ちくしょう!!」

気付けば俺は畑の方へと向かって駆け出していた。

生い茂る雑草を掻き分けて、俺は姫月二葉のすぐ隣で立ち止まる。

「え……？ キミ、何で？」

彼女は草を握り締めながら、啞然とした顔で俺の事を見つめていた。

「……俺がやる。俺が草取り代わるから、お前は少し休んでろ」

俺はそう言つてすぐにしゃがみ込み、目の前にある雑草へと手を伸ばす。

「ど、どうしたの？ あたしの代わりに草取りやるって――」

「そのまんまの意味だよ。見てられないんだ、そんなやり方じゃない

つまで経っても終わりはしないつつの」

俺は姫月二葉が抜いたはずの雑草へと視線を移した。

思った通りめちゃくちゃな抜き方だった。抜いたと言うよりも、中途半端な所からちぎれてしまっていると言った方が正しいかもしれない。

多分草の握る場所を間違えていたのだろう。根っこに近い部分を掴んで引つ張ればいいのを、わざわざ先端の葉の方を掴んでいたようだ。

小さい草ならまだいいが、背の高い草はちぎれているものばかりで、しっかりと草を抜いていると言いがたい。

「雑草は生命力が強いから、こんな中途半端なやり方じゃすぐに元通りになっちまう。抜く時はちゃんと根っこからじゃないとダメなんだ」

俺はそう言いながら手際よく草を抜いていく。

「すごい、そうやってやるんだ……」

農作業を全く知らない都会っ子から見れば、きっと草取りの当たり前な動作だつて素晴らしく思えてしまうのかもしれない。そんな何も知らない奴が、いきなり立派な畑を作るだなんて無茶にも程がある話だ。

「……ふう、結構抜いたな」

と言つても、まだ半分以上残っている雑草を見てると目眩がしてくる。いくら俺でも残りの時間でこの全てをとれる気はしない。居ても立ってもいられなくて、何も考えないで手伝ってしまったが……。冷静になつて考えてみれば、こんな事をやったって俺には

何の得もない。

手本は見せた。やり方さえ分かれば、きっと姫月二葉も上手くやつてくれるだろう。後は適当に理由を付けて帰ってしまえば、何の問題も――

「イチ、キミって農業とかやった事あるの!？」

「イチ……?」

何とも聞き慣れない言葉だった。俺はその言葉の意味を聞き返そうと、彼女の方に振り向くと……姫月二葉が宝石の様に目をキラキラと輝かせている。

「その『イチ』っていうのは、一体何の事なんだ？」

「キミの名前って京一でしょ。だからイチ。良いあだ名だと思うない?」

イチなんてあだ名で呼ばれるなんて今まで一度もなかった事だ。良いあだ名、なんて言われたって正直な所全然しっくりこない。

「それにしたって……まさかあたしの手伝いをしてくれる人がいるだなんて思ってもいなかったよ。ずっと一人でやるうって、誰の手助けもいらないうって思ってたのに」

「……一人でやるうって、そんなもん無理に決まってるだろ」

やっぱり思った通り、随分と無謀な事を考えていたようだ。

これで分かっただろう。言うだけなら簡単なんだって、こんな荒地を元に戻すだなんて到底無理だと納得しているに違いない。しかし、どうにも様子がおかしかった。今までの様子と全く異なっていた。

姫月二葉が放っていたあの威圧的な雰囲気も、俺に向けられていた鋭い視線も、今の彼女からは全く感じられず、むしろ羨望の眼差しを俺へと向ける。

「うん、一人じゃダメだっていうのはよく分かった。だから、明日もよろしくね」

「……は？」

何言ってるんだ、こいつ。って……おい、もしかして――

「――だから、明日も一緒に草むしりしようね」

そう言いながら彼女は愛嬌いっぱい笑顔で俺へと振りまく。

しかし、その言葉も、その笑顔も、農業から離れたい俺にとって悪魔の囁きのように感じ取れてしまっていた。

「おいおい、ちょっと待て。何で明日も俺が参加する事になってるんだよ」

「だって、あたし農作業とか全然やった事ないし……。それに比べてイチはすごく手際がいいんだもん。経験者？　って思っちゃうくらい」

「いや、だって俺は……そもそもこの土地の――」

――この土地の所有者で、家が農業やってるし。そう言おうとした瞬間に、俺は右手で自らの口を塞いだ。

（……よく考えてみるよ、俺）

姫月二葉はこの畑をめちゃくちやにした奴の事を許せない、って言ったんだ。もし俺がこの土地の所有者で、荒地にした張本人であると知ったら一体何をされるのか全く予想が付かない。それに俺の

家が農業をやってるって知らただけでも、色々と面倒な事になってしまうのは目に見えている。

地面に飛び出たあからさまな地雷を、わざわざ両足で踏みぬくなんて危険な事まず出来る訳がない。ここは冷静に、適当な事を言うてごまかすのが妥当だ。

「——この土地のちょっと近くに家があるから、見て覚えたただけの話で、農業の経験なんて全然ないからなあ、あははは……」

必死に作り笑顔を浮かべるが、どうやら成功したらしかった。

姫月二葉は俺の言葉に何の疑問も浮かべていないようで、なるほどといった感じで首を縦に振っている。

「でも、あたしなんかより断然すごいよ。見ただけで覚えられるだなんて、あたしには絶対無理だもん」

ああ、無理だろう。俺だって無理だ。見ただけで農作業を覚えられるだなんて、絶対記憶能力の持ち主だとかそういう超人くらいにしか出来ない芸当だ。

まあ、姫月二葉の話がどうあれ、まさか草むしり程度でここまで喜んでもらえるとは想定外だ。適当に見本になる程度で終わりにするとか、それくらいで良かったのに……まさか、明日も手伝えと言われるなんて……。

（こ、断り辛い……！）

もうなんて言うか、彼女の視線が痛かった。彼女が俺に向ける羨望の眼差しが俺の心へと突き刺さる。

仮に俺が断ったとしても、こいつは明日も今日のように一人で草取りをしているだろう。それで今日みたいに何かに足を躓いて……

ヘタをすればケガをしてしまう事だっ て考えられる。

それに、本来ならば俺がやらなくてはいけない畑の管理を、別の女の子にやらせるだなんて事を父が知ったら一体何をされるか分かったものじゃない……。 姫月二葉の方も放っておいたら何をしてくるか分からないし、いつその事俺がこいつを監視して、やってる最中に適当な理由を付けて作業を止めさせたらいい。

「……はあ。じゃあ、とりあえず明日もな」

ため息混じりに俺がそう答えると、彼女は満面の笑みを浮かべながら信じられない事を言った。

「うん！ じゃあ明日の朝六時に集合だから遅れないようにね」

もはやこいつが何を言っているのか分からない。

「朝の六時ってお前…… 本気でそれ言ってるのか？」

「本気も本気よ。春休みとか夏休みだったら時間にも余裕があるけど、明日からはちゃんと授業もあるし、こっやって草を取ってる時間もあんまりないじゃない」

「いやまあ、今日は入学式って事で一応時間はあったかもしれないけど……。 だからと言って明日の朝からまた草取りやるだなんて……」

「部活と一緒に。朝の時間や放課後の時間をもっと有効に使わなくちゃ」

言いたい事は分かる。しかし、学校の気怠い授業よりも、もっと嫌いな農作業を朝からやるだなんて、想像しただけで頭が痛くなってしまう程に最悪なものだ。

彼女は俺のそんな気持ちなんていざしらず、体操着についた泥を手で払ったと思うと、

「それじゃあ、明日もよろしくね。イチ」

草むらの何処かに片付けてあったカバンを拾い上げ、彼女はそのまま駆けて行く。

俺はその様子を見つめながら、大きくため息をついた。

「……おかしい。こんな予定じゃなかったんだが」

姫月二葉の事を監視すると言っても、流石に部活の朝練みたいな事をするだなんて想定外もいいところだ。あいつの連絡先なんて知る由もないので、今更断るだなんて事も出来やしない。

「何も言わないでサボったりしたら、一体何されるかも分かんねえしなあ……」

明日は仕方ないとしてそれ以降はどうするべきなのだろうか？

あいつの性格から考えて、そう易々と諦めてくれるとは思えない。どうにかして上手い事を言って、この荒地を立派な畑にするなんて事止めさせなくてはいけない。

まあ、とにかく明日だ。明日にならなくちゃ何も進まないんだ。

とりあえず今はあいつを止める為の作戦を考えつつ、この疲れた体を癒そうじゃないか。

ふかふかのベッドと気持ちの良いシャワーを目指して、俺はアスファルトの道路の上をずんずんと進んでいった。

妹登場

太陽は落ち、辺りはもう暗くなっている。

家に帰った直後自室へと駆け込み、俺はそのままベッドの上で横になっていた。

草むしりと言っても久しぶりの農作業だ。体中はもうヘトヘトで動く体力なんて何処にも残されていない。

「……これじゃあゲームをする気力もねえよ」

目の前にある携帯ゲーム機を見つめながらそう呟く。夜中になったらゲームでもして時間を潰すのが日課であったが、今日に限ってはゲームをする気も起きはしない。

布団の中にうずくまり夕飯まで一眠りしようと思った時だった、俺に休む暇を与える余裕もなく、自室の扉をノックする音が聞こえてくる。

「兄ちゃん、入るよー」

俺の返事を待たないで何の躊躇もなく部屋に入ってくる声の主。背丈は俺の胸元ぐらいしかまでなく、肩まで伸びた茶髪のセミロングを揺らしながら俺の方へと近づく少女の姿。

名前は九乃^{ここの}、こいつは俺の『妹』だった。

妹の容姿を端的に説明すれば『俺の持つ遺伝子配列をどう弄ったってお互いが似通う事はない』と言った感じで、実際周りの評価はそんなところだった。二人で街中を歩いていても、お互いが兄妹だと思われる事はまずない。

俺とは比べ物にならないくらい整った顔付き、兄から見ても素直に可愛らしいと思える容姿だった。

「兄ちゃん、ちょっとこのゲームの事なんだけいいか？」
妹は片手に持った携帯ゲームの画面を俺へと見せる。

「……妹よ。今こうやって横たわる俺の姿を見てどう思う？」
「んー？ とつても疲れてるから、今の俺には関わるな」って顔してると思うなあ」

そう言っつて満面の笑みを浮かべる妹。

こいつとは長い付き合いで、言っても言わなくても俺の考えをよく分かってくれる。

まさしく彼女の言う通り今の俺にはゲームをやっている気力なんて残されていない。

「まあまあ、兄ちゃんもそんな事言わないでさ。可愛い妹と楽しく遊んでよ」

「自分で自分の事可愛いとか言うな。ナルシストか、お前は」

「そんなんじゃないよ？ ボクはあくまで謙虚に、客観的な視点で事実を述べてるもので」

「……謙虚とか客観的とか、つい最近までランドセルを担いでいた奴が吐くようなセリフじゃないな」

「いやいや」。昔からよく大人びてるって言われるじゃないか」

「大人びてるっつうか何っつうか……お前の場合はもう変人のレベルだよ」

そう、それはもうおかしなぐらいだった。

子供とは思えないくらい気が利くし、場の空気だつてしっかり読める。子供同士で無邪気に遊んでいるよりも、近所の奥さんやら親父の友達と喋っている時の方が随分とこなれていて、たまに本当に大人なんじゃないか？ と思える程だった。

「変人とか兄ちゃんもなかなかヒドい事言っなあ……」

そう言ったと思うと、妹は部屋の中にある着替えの入ったタンスへと指を差す。

「でも、タンスの中にえっちい本を隠してる兄ちゃんには言われたくないものだけど」

口に手を当ててムッフ、と照れ笑いをする我が妹。

「うえっ……!?!」

中学の頃から一度も見つかっていなかったはずの、秘境とも言える工口本の隠し場所。それを言い当てられるなんて思ってもいなかった事だ。動揺を隠しきれるはずもない。

「兄ちゃんが無処に何を隠しても、そんなの全部お見通しだよっ」

「……ぐっ、何てやつだ」

「ふっふ」。それだけじゃなくて、兄ちゃんまだボクに内緒にしていることあるよね？」

「お……お前にしてる隠し事？」

冷蔵庫に入っていた三個入りのプリンを内緒で独り占めした事か？ いや待て、それは昨日バレて夜中のコンビニまで買いに走らされたはず。

俺の持っている工口本の位置まで把握している様な奴だ。こいつ相手に隠し事なんて出来るはずもないし、プリン以外では最近思い当たるような事もない。

「ふふ〜ん、何だか自分でもよく分かんないって顔してるね。じゃあ仕方ないなあ、ボクがその答えを教えてあげる」

言いながら、ずいっと俺の眼前にまで顔を寄せる妹。
そして彼女のその言葉に耳を疑った。

「……今日の夕方、あの場所で兄ちゃん何してたの？」

心臓がどくん、と飛び跳ねる。

「あの場所で何してたって、もしかしてお前——」

「——そ、見てたよ。兄ちゃんが知らない女の人と一緒に草むしりしてたトコ」

「う、嘘だろ……？」

「嘘じゃないよ。後ろの方で見てただけど、兄ちゃん草むしりに集中してるばかりで、全然ボクの事に気が付かないんだもん」

妹の言う通りあの時は草を取るばかりに集中していて周りの事なんか目に入らなかった。

ていうかそもそも何でこいつがあの場合にいたんだ？ あんな荒地に用があるなんて思えないし、わざわざ俺を迎えに来るなんて道理もない。

「いや、ボクも入学式が終わっちゃって退屈だったんだ。それで犬の散歩でもしようと思って外を歩いてたら、兄ちゃんの姿を見つけてさ」

妹は言いながらにこやかスマイルを浮かべた。

「つまり……俺がやってた事を全部見てたって訳か……」

俺はがつくりとうな垂れる。俺が農業なんて二度とやらないんだと、そんなものには興味がないんだって、そういう風に聞かせた身内の人間に見られていたなんて——

「——もしかして、親父達も知ってたりするの？」

一番知られてはいけない人物、自分のやりたいように生きていく中での一番の障害。

もし彼等に知られているような事になっていたら、それはもう最悪だった。

「そんな心配しなくて良いって。パパ達は全然知らないから！」

その言葉に俺はほつと息をつく。

「何だ……ソレなら良かった」

最悪な事態は免れている訳か。しかし、妹に俺が農作業をやっていた事を知られているのも色々とマズい気がする。だって――

「――でも、もしパパ達が兄ちゃんが農業へのやる気が出たって聞いたら、きっとその日の夕飯はお寿司とかになるかもしれないか。それはそれでいいかもっ」

こんな事を言い出し始めるのだから、結局は時限爆弾を抱え込んでしまった事には変わりはないのだ。全くもって困った事になってしまった。

「……はあ。どうしてこんな事になっちゃったんだか」

全ての始まりは姫月二葉、あいつにある。何とかしてあいつを止めなくてはならない。親父達に気付かれるよりも早く、事を穏便に済ませなくては……。

「ふふっ、色々悩んでるご様子だね。でも、頑張つてよ。兄ちゃんならきつと上手く出来るはずだから」

そう言って妹は俺から離れ、扉の方へと向かって歩いて行く。

「じゃあ、そろそろ夕飯だと思うし、ボクは部屋に戻るね。夕飯になつたらちゃんとキッチンにまで来るんだよ？ みんなが食べ終わるまで待つとか、一人で部屋で食べるとか、そういうのは絶対ダメなんだぞっ」

俺は毛布に包まりながら、妹が部屋を出ていくのを黙って見ていた。

きつと上手く出来るといふ彼女の言葉。

それはあの荒地を畑へと戻す事に対して言っているのか、それとも姫月二葉を止める事に対して言っているのか……まあどちらにしろ、あいつの言葉なんて深く考えないに越した事はない。

「とりあえず、一眠りでもするか……」

俺は毛布に包まってゆっくりと瞼を閉じる。

ご飯が出来たと母親に呼ばれたのは、その数分後の事だった。

朝練ではなく朝農

現在の時刻はまだ父も母も眠っている朝の五時。

「ねみい……ダルい……今すぐ横になって寝たい」

俺は今一体何をしているんだっけか。ああ、そうそう、昨日の草むしりの続きをやるんだ。その為にわざわざ五時に目覚ましを掛けて、あの荒地に行く支度をしている訳か。

昨日はいつもより多めに睡眠時間を取ったはずなのに、やはり慣れない事すると辛いと言うか、どう足掻いたって眠いものは眠いだ。

大きくあくびをしながら、俺は体を精一杯伸ばす。

とりあえずどれだけ早く起きようが、朝の支度はしっかりしなくては。

俺は扉を開けて部屋の外へと出ようとした。

親父達にバレないように、ゆっくりと音をたてないように扉を開けていく。するとそれと同じタイミングで、向かいの部屋の扉も開いていく。

「おはよ……」

眠そうに目をこすりながら、俺の目の前に現れたのは妹だった。

「……何でお前まで起きてるんだよ。今何時なのか分かってんのか？」

妹はあくびをしながら眠そうに俺の質問へと答える。

「だって、兄ちゃんの部屋の目覚ましがうるさいんだもん」

まあ確かに俺の部屋と妹の部屋は向かい同士だが、今まで一緒に暮らしてきて目覚ましに隣にまで響いてきて起きる、なんて事は今までなかったはずだ。

こいつの事だ。何かを嗅ぎつけて、こつやって起きてきたに違いない。

「もう一眠りしたらどうだ。学校行く時間なんてまだ先だし、起きてたって仕方ないだろう？」

「いやいや、兄ちゃんと一緒に一回起きちゃうとなかなか寝付けない体質なもので」

「嘘つけ。いつも家を出るギリギリの時間まで二度寝やら三度寝してるくせに。それにいくら寝付きにくい体質だったとしても、この時間ならすぐに寝れるはずだろ」

ていうか寝て欲しかった。二人でこんな所でガヤガヤやってたら親父達が起きちゃう。

俺が朝から畑の草むしりに行くだなんて事をあいつらだけには知られたくはない。

「今は構ってる暇ないから、言われた通り早く寝ろ。早起きは三文の得、ってのは嘘っぱちだからな」

俺はそう言っただけで妹の横を通り抜けるように洗面所の方へと向かうとした。しかし、その動きを阻むように妹は俺の腕を掴む。

「嘘っぱちじゃないよ。今の兄ちゃんにとっては……少なからずね」

じつと妹は俺を見つめていた。その表情には今までの眠そうな雰

困気も、幼稚な子供らしさなど何処にも感じられない。

たまにこいつはこういう大人びた雰囲気を見せる。

本当に同じ血が流れているのかと、疑問に思える程の雰囲気を放つ。

「やれやれ……。とりあえずキッチンの方行くぞ。ここだと親父達が起きちまう」

その言葉で妹は俺の腕から手を離し、キッチンのある方へと体を向ける。

「うん、そうだね。そーしよっか」

俺と妹はキッチンに入り、椅子の上へと腰を付く。

「んで？ 一体どういった要件なんだ？」

「要件っていうかなんて言うか、ボクから兄ちゃんへの僅かながらの協力というか……。うん、とにかくそんな感じ」

「僅かながらの協力って、お前俺が何しようとしてるのか知ってるのか？」

まさか、と思った。普段じゃ考えられない時間に起きている訳だが、だからと言って俺がこれから何をしようとしているのかなんて分かる訳がない。

「ふふん、ボクを誰だと思ってるの？ 兄ちゃんが何を隠してしても全部お見通しだって言っただよな」

そついや昨日の夜そんな事を言っていた。しかし、いくら何でも勘が良すぎるって話だ。相手の考えている事を読む超能力でも持つ

てるんじゃないだろうか。

自信満々な表情を浮かべる妹。

これじゃあ知らないフリをしても無駄なんだろうな……。

「全く……。そうだよ、そう。これから昨日の草むしりの続きをす
るところだ」

俺がそう言うのと妹はニヤリと笑って、

「へー、そういう魂胆だったのか。全然分かんなかったよ」

「……は？ いや、待て。今お前全然分からなかったって言ったの
か？ 俺の隠し事なんて全部お見通しだって、さっきの台詞は——
——しまった、と思った時には既に遅かった。」

「ふっふ。兄ちゃんの隠し事なんて全然分からなかったのが本音
だよ」

満面の笑みを浮かべながらそう答える妹。

完全にしてやられた。こいつ俺の事を騙してやがってたのか……。
適当な事を言って、俺から情報を聞き出そうとしてたって訳か。

「……お前、詐欺師の才能とかあるんじゃないの？」

テーブルに向かってがつくりと頂垂れながら俺は大きくため息を
つく。

あんな自信満々の表情を見せられたら、誰だって本当の事を答え
てしまう。本当に天使みたいな顔して悪魔みたいな奴だ……。

「でもでも、兄ちゃんの協力をしようって思ってるのは本当の事な
んだよ？ 普通に聞いたって答えてくれなさそうだったし、ちよっ
と悪い気はしたけど……」

「それでわざわざこんな方法使って聞き出そうとした訳か。全くお

前は本当に未恐ろしい奴だな」

呆れるとかそういうの飛び越えて、もはや感心するレベルだ。妹だけは敵に回しちゃいけない。心の底からそう思うね。

「で、その協力っていうのはどんな事してくれるんだ？ まさか思いついてないとか、そういうオチはねーよな？」

「大丈夫、今この瞬間に思いついたから」

おいおい、そんなんで本当に大丈夫なのかよ……。

「それじゃあえっと、説明するね。ボクが出来る協力は些細なものかもしれないけど、色々とやりやすくなるのは間違いないと思うんだ」

「色々とやりやすくなる？」

「うん、例えば今日の朝の事もそう。パパ達に見つからないように、いくら兄ちゃんが朝早く家を出たとしても、結局は家にいないんだから『一体あいつは何処に行ったんだ』って思われちゃうでしょ？ それってつまり、パパ達に内緒で兄ちゃんが何かをしている事がバレちゃう訳」

「まあ、そうなるな」

朝から一度も姿を見せずに学校へ行くだなんて難しい話だ。そうなれば親父達も俺が寝坊をしているんだとか、ヘタをすれば家出をしているんじゃないかと思われてしまう。仮にその誤解が解けても朝から何をやっていたのか追求されるのは目に見えている話だ。

「それで、そうならないようにボクがパパ達を説得する。そうすれば兄ちゃんが朝早くからいない事だって不思議に思わないだろうしね」

「説得って……一体何を言うつもりなんだ？」

そういえばこいつ、昨日の夜に俺が農作業をやってる事を親父達が知れば寿司が食えるだの何だの言ってたな。まさか正直に話すつもりなんじゃないだろうか？

「そんな怖い顔しないでよ。本当の事なんて絶対言わないから。ボクがパパ達を説得する内容はものすごく単純な事だよ」

「単純な事……」

「そう、それは多分魔法の言葉。聞いた瞬間にパパ達は何も言えなくなると思う」

そう言った後、妹はまた不敵に微笑んだ。

「兄ちゃんが部活を始めました、ただそれを言うだけで良いんだ」

「ぶ、部活……？」

「うん。兄ちゃんは出来ればパパ達とは話したくないだろうし、ボクが仲介に入れば素直にその言葉を伝えられるでしょ？ そうすれば朝早く家を出たって朝練だと思われるし、帰るのが遅くなっても部活が長引いたって思われる。どう？ とっても素敵な言葉だと思わないかな？」

ああ、思う。些細で素敵な協力だ。だけど妹よ、少しだけツッコミたい事がある――

「どうしてお前はそんなにスラスラと思いつく事が出来るんだよ……」

腰に両腕を当てて、妹はまた自信に溢れた表情で、

「まあボクは兄ちゃんよりずっと頭が回るからね」

つい最近まで小学生だったような奴が、俺なんかよりもずっと頭

が冴えて、なおかつ俺が置かれている状況に対してここまでの確な協力をしてくれるだなんて……何というか、本当に出来過ぎた妹を持ってしまったもんだな。

「よし、それじゃあそういう手筈で頼むぜ。俺はこれから支度をしてくるからよ」

「おっけー。じゃあボクは部屋に戻ってもう一眠りしてこようかな」
「何だ。あんだだけ眠れないって言ってたのに、結局は寝ちまうのかよ」

「そうだよ、さつきからずっと我慢してたんだから。それじゃあおやすみ、兄ちゃん。上手いことやるんだぞ？」

妹は親指を立てながら俺に向かってウィンクをし、キッチンから出ていった。

「……さてと、じゃあ早速支度をして向かいますか」

早いとこ姫月二葉の暴走を止めて、農業からかけ離れた一般的な高校生活を送ろうじゃないか。悪いな、妹よ。お前の言っている部活には早々と退部しちまう事になりそうだぜ。

俺はそのまま洗面所へと向かい顔を洗い歯を磨き、その後部屋に戻って新品の体操着へと手を伸ばす。

昨日は仕方なく制服姿で草むしりをやった訳だが、今日は素直に体操着で参加させてもらう。制服に泥でもついて親父達に見られたら最悪だ。

支度を終えた俺は玄関へと向かい、出来る限り音を立てないように外へと出ていった。

家の外、玄関のすぐ横にいる我が家の飼い犬が俺の姿を見て尻尾を振っているが、今はこいつの相手をしている暇もない。

「ちょっと出かけてくるから、お前は静かにしてるんだぞ？」

人差し指を口に当ててシートと言いながら、俺は学校へと続く道路の方へと駆けていく。

時間も時間なので道路を走る車も、俺以外の人の姿も何処にもない。腕時計で時間を確認すると、まだまだ姫月二葉が言っていた予定時刻の六時までには余裕があるようだ。

別に急ぐこともない。とりあえず、のんびり歩きながらあいつを止める為の手段を考える事にしよう。

そう思って必死に色々考えながら進んでいくのだが、何も思いつかないまま目的地に到着してしまっている自分がいた。

「はあ……妹みたいに俺も頭が冴えたらなあ……」

妹にも一応相談しておけば良かったか。あいつならいくらでも良い手段を思いついてくれただろう。少し失敗したな、と思いながら草ぼうぼうの荒地へと視線を向ける。

「……おかしいな。まだ予定時刻より十五分程早いはずなんだけど」

もう一度時計を確認する。まだ時計の針は六時を示していない。それなのに雑草まみれの荒地の中で、せっせと草取りをする姫月二葉の姿がそこにあった。

「——あ！ イチ、遅いじゃない。何やってたのよ！」

俺の存在に気が付いたのか、手を止めてこちらに振り向く彼女の姿。

遅いじゃない、ってお前が早すぎるんだろ……と心の中で思いながら、俺は姫月二葉の方へと近づいて行く。

「……お前一体何時からやってたんだよ」
まだ予定時刻にもなっていないというのに、姫月二葉の体操着は泥だらけになっている。

「五時半前には始めてたよ。もう居ても立ってもいられなくなっちゃって、予定よりもずっと早く出てきちゃった」

「居ても立ってもいられなくなっちゃって……お前」

どうしてこいつは草むしりぐらいで、そんな興奮する事が出来るんだろうか。全くもってこいつの考えは分かん。俺にとってはただの苦痛な作業でしかないというのに。

「それじゃあイチも来た事だし、早いとこ終わらせちゃいましょう。あたしの立派な農園を開くために、まずはその第一歩ね」

「まあ……その第一歩がとんでもないくらい高い壁に阻まれてる訳だけだな」

昨日やったのは荒地全体の一割くらいだ。相変わらず姫月二葉は戦力にならなそうだし、実際俺一人で全部やってしまう事に変わりはない。

「……とりあえず、草は俺が取る。姫月は抜いた草を一箇所に集めといてくれ」

俺がそう言うのと姫月二葉は頷いて、昨日から放っておいた雑草の残骸を拾い集める。

まあこいつにはこれくらいが妥当なもんだろう。俺はとりあえず適当に草を抜いて、この作業を中断させるような上手い一言を思いつかねばならない。

ゆっくりと腰を落として、俺は草むしりを始めた。

その横で鼻歌を歌いながら、それはもう楽しそうに雑草を集める
姫月二葉。

本当に不思議な奴だ。普通だったら嫌がりそうな単純な作業なのに、それをまるで遊んでいるかのようにやっているのだから。どうやったらそこまで楽しめるのかと、一言アドバイスを頂きたい程だね……。

まあそんな事を実際聞くわけでもなく、俺は黙々と草むしりを続けた。

やはり腰をかがめて延々と作業し続けるのは大変なもので、始めて二十分くらいで動きが段々鈍くなってくる。いくらやっても雑草はまだまだ残っているし、一体どうしたもんかと俺は手を止めて立ち上がった。

「……なあ、姫月よ。さっきお前立派な農園を開く為、とかどうとか言ってたけど。お前の予定ではこの荒地をどんな風に改造するつもりなんだ？」

俺の言葉に姫月も動きを止める。

「ええと、そうね。あたしの予定だとやっぱりメインは野菜なの。それと花も色んな所に植えて見た目も良くして、動物も飼って牧場みたいな事もやってみたいかな」

「ぼ、牧場……？ まさか、牛とかそういう方面の事言ってる訳じゃ——ないよな？」

「ええ、その通りよ。毎日その飼ってる牛で乳搾りをするの。その牛乳でアイスクリームとかバターみたいなのを作って、想像しただけでも楽しそうでしょ？」

ああ、楽しそうだ。その一場面だけを想像するのならな。

俺は額に手を当ててわざとらしくため息をついてみせた。

「楽しそうだけどさ、いくら何でもそりゃ無理だよ」

色々と思い知らされる。こいつが農業に対する知識をこれっぽちも持っていない事を。野菜や花ならまだ許容範囲かもしれないが、こんな場所で家畜を育てるなんて土台無理な話だ。辺りに新築住居が立ち並ぶような場所で家畜を飼えば、家畜の糞尿やらの臭いで周りにから苦情が来るのは目に見えてる。

今のところ畑をほったらかしにしていって、近隣の人間から苦情が出てないだけでも奇跡だつて言えるのに、それ以上の事をされたらたまったものじゃない。

それに家畜を飼うだなんて簡単に言ってくれるが、野菜や花なんかとは比べ物にならないくらい大変なんだ。いくら何でもそれだけは不可能だ。

「とにかく牛とか豚とか鶏とか、そういうのは全面的に却下。やるならせめてウサギとか適当にそこら辺にしとけ」

まあウサギなんて農業には全く関係のないもので、家畜としてウサギの肉を食う奴なんて存在しない。だから、姫月二葉を諦めさせる為にそう言っただけだつたのだが――

「――良いわね、ウサギ！　すつごく可愛いしウサギだつたらあたしにも出来そう！」

そんな事を満面の笑みを浮かべながら言うもんだから、しまった……言い方を間違えたと後悔しても既に遅かった。姫月二葉はこの草取りが終わったら何処にウサギを飼おうかなんて事を考え始めたようだった。

「……はあ」

こいつを諦めさせるどころか、むしろやる気が出るような事を言ってしまうなんて、本当に俺はセンスがない。もっとキツく言ってやる方が言いんだろうか？ 姫月二葉が怒り出してしまুকくらいめちやくちやに言って……後味は悪いかもしれないが、いつその事そっちの方がいいのでは――

「どうしたの？ さっきからため息ばかりついて。もしかしてお腹でも空いた？」

姫月二葉がうな垂れる俺の顔を覗き込んでいた。相変わらず顔が近い、そりやもう、鼻と鼻がぶつかりそうになるくらい近かった。

俺は咄嗟に彼女から離れようとした。しかし――

「……おわっ！！」

俺は何かに足を躓き、体勢を保てず前のめりに倒れこんでしまった。

「……っ痛――いけど、何だこれ……」

柔らかい何かがむにゅり、と俺の体に押し当たる。俺はでその何かを確かめるように右手で掴んだ。丸っこくてむにゅにゅにしている心地いい。荒地にこんな柔らかい物なんて落ちていなかったはずだし、一体何なのか思いつく事さえ出来ない。

俺はゆっくりと、その何かを確かめるように瞼を開いた。

「……あれ？」

目を開くと目の前には姫月二葉の姿があった。

どうやら俺が前のめりに倒れたせいで、彼女を巻き込んだ形になったらしい。

そして俺はようやく気が付いた。俺が掴んでいるその柔らかい何か、それは――

「――お、おっばい？」

もう一度確かめるように手を動かす。それは確かに姫月二葉の胸だった。

多分、今の状況を客観的に見れば、俺がちょうど彼女を押し倒したように、朝から一体どれだけ盛ってんだお前らと言われんばかりの状況なのだろう。ていうか何を冷静に解説してんだって俺！！やばいでしょ、押し倒して胸を揉むとかこれ完全にアウトでしょ！？

俺は直ぐ様彼女の胸から手を離し、両手を合わせ必死に謝った。

「ごめん！ これは不可抗力であって……別に悪気があった訳だとか、やましい気持ちがあったのではなくて、その、なんて言うか……とにかくごめん！！」

姫月二葉は俺と顔を合わせないように横を向きながら声を張り上げる。

「い、良いから早くどいてよ！ いつまで乗ってんのよ、このバカっ」

俺はその言葉で立ち上がり、二歩三歩と後ろに下がった。

それに続いて彼女も立ち上がるが、顔を真っ赤にして目も合わせたくない。

「突然倒れちゃって本当にスマン。ケガとか……してないか？」

彼女は背中についた泥を手で払いながら、小さくため息をついた。

「ケガなんてしてないし、この変態スケベ」

「はい……本当にすみません……」

こうやって謝りながらも、俺は同じシチュエーションに巡り合えないかと淡い期待を抱いていた。胸の方も着痩せしているのか知らないが、見た目以上に大きくて柔らかくて……それに姫月二葉が頬を真っ赤に染める姿は何だか新鮮で、少しだけ可愛らしいとも思えてしまう。

「何謝りながらニヤニヤしてるのよ。ムツツリスケベ」

姫月二葉から鋭くて痛い視線が飛んできたので、俺は直ぐ様本能に理性という蓋をする。

「まあほら、もうコケないように気をつけるさ。さつきはケガしなくて済んだけど、次は何処かケガしちゃうかもしれないしな、うん」
「……どうだか。はあ、少しだけ休憩しましょ。おっきな声出したら疲れちゃった」

姫月二葉は道路側に置いてあるカバンの方に向かって近付き、そこにゆっくりと腰をおろす。

「ところで、イチ。キミって今日朝ご飯食べてきた？」

「ん？ そういや朝飯食って来なかったな」

妹と話してる事に気を取られ、そんな事すっかり忘れていた。

朝っぱらからの草むしりで腹は空いているし、かと言って朝飯になるような物も持ってきていない。

「その様子じゃ何にも準備してこなかったみたいね」

姫月二葉は言いながらカバンの中に手を入れて、ガサゴソと何かを探し始める。

そして中から出てきたのは弁当箱だった。中には色とりどりのおにぎりが所狭しと並べられており、見た限りでは女の子が一人で食べるには多すぎるようにも思える。

「お前、わざわざ俺の分まで作ってくれたのか？」

俺がそう言うとは何故だか姫月二葉はまた頬を紅く染めて、

「ち、違っわよ！ 単にはりきり過ぎてたくさん作っちゃっただけで……って、何でまたニヤニヤしてるのよ！？」

だってもうニヤニヤせざるを得ないだろ、コレ。

どう考えたって今の台詞は言い訳で、俺の為におにぎりを作ってくれたとは思えない。

「も、もう！ いいわよ、全部あたし一人で食べるから」

「あゝ！ 待て待て、ちゃんとありがたく頂くから。そう変に心配するなっつて」

俺は弁当の中のおにぎりに手を伸ばす。

「んじゃ、いただきます」
ぱくり、と一口。

見た目通り美味しくて、空きっ腹には最高の朝ご飯だった。

握る強さも丁度よく、お米がふわふわとしていて食べやすい。

「……」

姫月二葉は俺がそのおにぎりを食べ終わるのをじっと見つめていて、見るからに俺の感想を待っているようだった。

何だか本当に可愛らしい。ていうか、昨日の不機嫌そうな雰囲気は一体全体何処に行ってしまったんだろうか。学校にいる時は常に冷たい視線で俺を見ていたはずなのに、こうして二人でいる時は何だか照れてるような様子に見える。

「……ど、どう？」

感想が待ちきれなかったのか、姫月二葉は沈黙を破って口を開く。俺は口の中をモゴモゴしながらおにぎりを飲み込んで、

「うん、最高に上手いよ。料理のセンスはあるかもな、姫月って」

俺のその言葉で姫月二葉は花が咲いたみたいに笑顔を見せたが、また頬を紅くして顔を俺とは反対側へと向ける。

「そ、そう。それなら良かったわ」

ただそう一言だけ呟き、弁当箱の中のおにぎりに手を伸ばした。そして彼女は荒地の方を見つめながら黙々とおにぎりを食べ始める。それにしても本当に美味しいおにぎりだ。一体何処の銘柄の米を使ってるのか気になってしまうのは、やはり俺の体の中に農家の血が流れているからなのだろうか？

気付けば弁当箱の中は空っぽで、姫月二葉が持ってきてくれたおにぎりの八割くらいは俺が食べてしまっていた。

「そんなにお腹へってたの？」

「ま、まあな。腹は減ってたし、さっきの草むしりで少し疲れてたしな。うん」

「ともかく満足してもらえたみたいで良かったわ」

彼女は弁当箱をカバンの中に入れて立ち上がり、体を大きく伸ばした。

「キミのお腹もいっぱいになったところだし、さっきの続きをやりましょ。早く草を取りきらなきゃ次のステップには行けないものね」
「次のステップ……か」

その言葉でようやく思い出す。

俺のそもそもの目的は姫月二葉の暴走を止める事であって、こうやって美味しいおにぎりを二人で食べる事じゃない。次のステップに行かれるよりも早くこんな事は終わらせなくてはいけない。

それでも、いくらそう思っても――

何故だか俺は、楽しそうに雑草を集める彼女を止める事が出来なかった。小さな頃の父の背目掛けて育っていた俺を見ているようで、真っ直ぐに農業を見つめる彼女の姿が眩しくて……何も言い出す事が出来なかった。

「どうしたの？ そんな所でボーっと突っ立って」

「え……？ い、いや、何にもねえよ。そうだな、さっさと草むしり終わらせるか」

俺は姫月の隣で腰を落とし、空に向かって伸びる雑草へ手を伸ばした。

屋上という名の青春

学校に着いて制服に着替え終わったのは、ホームルームの三分くらい前だった。

姫月が『時間のギリギリまでやるわよ！』なんて言うもんだから、畑から離れて教室に着くまではとにかく猛ダッシュ。もう息は切れぎれのヘトヘトで、これ以上動く体力なんて残されていない。この学校へ入ってから初めての初めての授業も一切頭には入らず、知らない内に昼休みの時間になっていた。

「ダルい……まじダルいぞ、コレ……」

前の授業で使った教科書をしまうこともなく、俺は机に突っ伏して唸り声を上げる。

無事草むしりの方は終わる事が出来たが、その代償としてどの授業も散々たるものになってしまった。授業毎にあった自己紹介なんかも一体自分で何言ったかすら覚えてないし、初っ端から寝ていたのだから教師の評価も最悪になっている事だろう。

「さっきから何ブツブツ言ってるの？」

俺は体をつ伏したまま顔だけを声の方へと向ける。

「あー……。何だ、姫月か」

不機嫌そうに両腕を組み鋭い視線で俺を睨む姫月。朝方とは随分態度が違うもんだぜ。

学校に着いてからは朝の可愛らしさなんて何処かへ行ってしまった、昨日みたいに不機嫌そうに俺と話しやがる。

「……俺の事なんて嫌いなんだろう。あっちいけよ」
そう言っただけでくされてみる。

こいつにとって俺という存在はあくまで『農作業のお手伝いさん』
といったところなのだろう。だから、あくまで奴隷的な立場の人間
とは仲良くなならないよう、学校にいる時は冷たく接してくるに違
い。

「……もうっ」

姫月は教室の中をきよろきよろと見回したと思うと、突然俺の耳
元に唇を近づける。

「大切な話があるから後で屋上に来て」

そう囁いたと思うと彼女はすぐに教室を出ていった。
俺は机から体を起こしてボーっとしている思考回路を動かし始め
る。

「屋上……だあ？」

気に入らない相手をシメる為、人気のない場所へと呼び出すアレ
だろうか？ いやいや待て、昨日から俺は姫月に奉仕しまくってた
だろう。だからシメられるなんてない、多分。

それじゃああれか？ 俺を屋上に呼び出して『好きです！ 付き
合ってください！』とか姫月に言われるのか？

「はあ……考えてる自分が馬鹿らしくなってきた」

疲れと眠気で色々頭がおかしくなってるな、これ。

とりあえず購買に行って昼飯を入手して。栄養補給をしながら屋
上に向かうとするか。

俺は立ち上がって購買へと向かう為に教室を後にした。

廊下には俺みたいに昼飯目的の奴がたくさんいるようだ、こんなに多いと自分の分がちゃんと確保できるのか心配になってくる。

「でも急ぎたくもないしな……ダルいし」

どうせ早く行っても購買に列が出来ていて順番待ちをさせられるだろうし、今頃人気商品の取り合いなんかも行われているだろう。そういう時は素直に行列が終わる頃を目掛けて行って、余っている物を買っておけばいい。

余り物には福があるというし、今回もその言葉は当てはまるはずだろう。

適当に他のクラスの様子でも観察しながら向かうとしますか。

俺は扉越しに見える別の教室の中を歩きながら眺めていた。

まだ幼い顔付きの奴やら同じ歳とは思えない老け顔の奴。進学校には似合わない不良っぽい奴もいて、本当に十人十色で見ているだけでも楽しかった。こいつらとどれだけ友達になれるのかとか、そういう事を考えていると気分も明るい方へと進んでいく。

その中である一人に目が止まった。

窓際で外を見つめながら黄昏ている女性の姿。腰くらいまで伸びた金色の髪、遠目でも分かる艶やかな白磁の肌で、まるで西洋の人のような美しい女性がそこいた。

「あの人って留学生か何かか？」

人工的な色とは違う自然な金髪、周りの生徒と見比べても同じ国の人とは思えない。

ああやって誰とも話さず外を眺めているのも、きっと日本語が分からなくて他の生徒達と馴染めないに違いない。

「ああいう子とお近づきになれたら最高なだけだなあ」

まあここは他のクラスだし、突然入って話しかけるなんて事する訳もないが、もし何か機会があれば仲良くなってみたい。やはり高校生活を色鮮やかに飾りたいならば、可愛い女の子とコミュニケーションは必須になってくるだろう。

「おっと、いつまでもこうしてちゃいられないな。ボーっとしてたら俺の分の昼飯がなくなっちゃう」

行列を回避する為に時間を調整するのはいいが、昼飯がなくなっでは本末転倒だ。

俺はその教室を後にして購買に向かって歩き始める。

やはり思った通り丁度いい頃合いだったようだ。購買の前にはほとんど人がおらず、商品もちゃんと残っている。

さてどれを今日の昼飯にしようか。やはり人気がなさそうな物ばかり残っているが、腹さえ膨れればそれでいい。適当にパンを三つほど手にとって、それを購買のおばさんに手渡した。

「はい、三百円ね」

そう言われて俺は財布の中の小銭を漁りだす。

俺みたいな貧乏学生にとって昼飯に三百円も使うのは手痛い出費だ。しかし、健康的な高校生活を満喫する為にもそんな事は言っていられないのだが――

「おろ……?」

小銭入れの中をいくら確認しても、焦げ茶に錆びた十円玉が五枚

と一円玉が六枚あるくらいで、白銀に輝く百円玉が何処にもない。

「あれ……？」

お札入れの方もスツカラカン。残金をいくら数えてみても五十六円しかない。

「しまった……そういえば――」

一昨日の夜、妹にプリンを買いに走らされた時、罰としてジュースやらアイスやら色々な物を買わされた事。それに加えて昨日ついコンビ二で買い物しちゃった事……おかげで財布の中が空だった事をすっかり忘れていた。

「どうしたんだい？　もしかしてお金ないのかい？」

「え、いや、その……お、お腹いっぱいなんでやつぱりいらなです！　あ、あはは！」

ドヤ顔でパンを手渡したのにお金がないなんて恥ずかしすぎて、俺は一目散にその場から逃げ出した。出来るだけ購買から離れようと全速力で駆けていく。そして階段の辺りで立ち止まり、俺は呼吸を整えようとする。

「はあ……はあ……。ありえねえ……なんでこういう時に金がないんだよ……」

絶望的だ。弁当もなければ、昼飯を買う金だつてない。

中学の頃の給食が恋しくてたまらなかった。ただでさえ疲れと眠気とダルさで限界だつていうのに、昼飯がなくては午後の授業なん

てやっつけていける気がしない。

「くそう……誰かから昼飯でも恵んでもらうか？」

と言っても知り合いと呼べるような人物なんて姫月以外にはいない。朝飯を食べさせてもらって、昼飯まで恵んでもらうだなんて、流石にそんな遠慮のない事をする訳にも行かないだろう。

「そっぴや……あいつに屋上来いって言われてたっけか」

栄養補給してから行くつもりだったのに。これじゃあ結局本末転倒だ。しかし、待たせすぎると何か言われそうだし、とりあえず屋上に向かうしかないだろう。

階段を登る足取りが重い。姫月の言っていた大切な話っていうのも、また俺を面倒事に巻き込むような内容なのは間違いない。だけど、もうこんな所にまで踏み入ってしまった、今更後戻りなんて事も出来るわけがない。

屋上に着いた俺はゆっくりと目の前の扉を開けていく。

そしてその先には、赤いツインテールを春風になびかせる姫月の姿があった。

「遅かったじゃない。一体何してたの？」

相も変わらず腕を組んで不機嫌そうにしている彼女。

「悪いな。昼飯買ってこようと思って購買寄ったら遅くなっちゃまった」

「……昼飯、ねえ」

姫月は俺の両手を見つめて小さくため息をつく。

「で、その昼飯とやらは一体何処にあるのかな？」

「え、えっと、それはその……」

言える訳がない。金がなくて昼飯すら買えなかったなんて、女の子に対して言えるような台詞じゃない。ここはなんとか上手く誤魔化さなくては――

「まあいいわ、とにかくこっちに座つて。大切な話があるの」

そう言つて彼女は屋上に置かれたベンチへと指を差す。

どうやら俺の昼飯事情なんて興味がないらしい。いや、まあそれはそれで今の状況では助かる事なのだけど、もう少し何か心配でもしてくれたら嬉しいのにと心の中で思う。

俺は彼女の言う通りベンチの上に腰をつき、雲一つない晴天を見つめる。

頭がボーっつとして思考回路がイカれてる。今ならこのまま空の彼方へ飛んで行けそうだ。

「イチ、大丈夫？ 学校来てからずっとボーっつとして、具合でも悪いの？」

「……なんつつか疲れと眠気で思考回路が麻痺してるっていうか、あと――」

言っている途中に腹の虫が音を鳴らす。しかも結構な音で鳴るものだから隠す事なんて出来る訳がなかった。

「――あと、やっぱり腹が減ってるからかな？ あはは……」

照れ隠しに笑いながら俺は素直にそう答える。

「昼飯を食べて栄養補給さえしていれば、もっとマトモになれる気もするんだけどな」

「……何だ。結局購買行って昼ご飯買ったっていうのは嘘なんじゃない」

「いや、嘘つつかなんつつか……。まあ、昼飯は食ってないよ。うん」

「食べてないなら最初から素直にそう言ってくれたらいいのに」

姫月はベンチの横に置いてあったカバンに手を伸ばす。

「はい、これ。お腹はいっぱいにはならないかもしれないけど、何にも食べないよりはいいでしょ？」

そう言って彼女が俺に手渡したのは一枚の板チョコだった。

「ほ、本当にいいのか？」

「別にいいよ。あたしはお腹いっぱいだし、残しておくのも勿体ないしね」

ありがたい気持ちでいっぱいだ。

まさか朝飯だけでなくこうやって昼飯にチョコまでくれるなんて、こいつもしかして本当はすごく良い奴なんじゃないだろうか？

板チョコを食べながら俺は隣に座る姫月をじっと見つめた。

顔だって可愛いし、よく考えたら性格だって悪くない。こんな子と二人きりで屋上にいるんだから、意外と良さげな状況なんじゃ――

「あたしの事見ながらどうしてニヤニヤしてんのよ、このバカ」

——そんな事を言われるもんだから、俺が思っていた理想的な雰囲気ではない事を理解せざるをえない。残念だ、女の子と二人きりの状況なら、もっと恋愛的なイベントが起きてくれたっていいのに……。

「……はあ。イチが一体何を考えてるかよく分からないけど、とにかく大切な話があるんだからよく聞きなさいよね」

そっぴやそうだったな。その為に呼ばれたんだもんな、俺は。

「あの畑の事なんだけど、午前中ちょっと考えてみたの。一体あそこをどうするか、どんな風に変えていくかをね」

「やっぱりそっち系の話か……」

僅かながらでも違う展開を期待していた俺がバカだった。まあ予想はついていたさ。こいつの事なんだから、それ以外の話で俺を呼んだりしないだろうって。

「で、どういう話なんだ？ また牛とか豚とかの話だったら帰るぞ」
「違う違う、そんな話じゃないわ。朝二人で草むしりしてて思ったんだけど、やっぱりもう少し人が多い方が良いと思うのよ」
「人が多い方が良いつて……」

それはちょっと待って欲しい。これ以上人が増えてしまったら本当に後戻りが出来なくなってしまう。姫月を止めて農作業からかけ離れた青春を送る事、それだけは達成しなくてはいけない。

「で、でも、一体誰が手伝ってくれるっていうんだ？ 農作業するだなんて言っただって、一般人がそんなの喜んで手伝ってくれる訳もないだろ？」

「そうかもしれないけど……」

まあ手伝ってくれる人がいないといっても、工夫次第で男子なら連れて来れるかもしれない。

姫月は可愛いし、そのルックスを活かして男共を誘惑すればイチ

コロだろう。しかし、それは俺が却下だ。むさい男と一緒に畑仕事なんてやりたくない。

「とにかく人を増やすのは駄目だ。農業は人が多い程良いつて訳じゃない。この世界は少数精鋭なんだ。だから二人で十分、人を増やす理由なんて何処にもない」

俺がそう言うと、姫月は元気なさそうに顔を俯ける。

「でも、あたしじゃ全然力にならないし。誰かもう一人でもいてくれたら、もっとイチが楽になれると思ったんだけど……」

確かに姫月の言う通り、ほとんど俺一人で作業をやっているに違いなかった。

まあこいつなりに俺の事を心配してくれているのだろう。しかし、俺としてはこれ以上事が大きくなつては困るので、やはりその気持ちを素直に受け取る訳にはいかない。

「そんな心配なんてするなって。俺一人でも十分だし、姫月だって始めたばかりなんだろう？　だったら俺の後ろ姿でも見て、少しずつ勉強していけばいいさ」

俺は姫月の頭を優しくポンポンと叩く。

「まあ元気だせよ。何とかなるからさ」

「うん、ありがとう。イチ」

姫月は俺の言葉で満足したように笑顔を見せる。
その表情を見つめながら、俺はすかさず頭の中でガッツポーズを

した。

なんという策士、俺。カッコイイ事を言って、人を増やすという話をお流れにさせてしまうなんて、やはり俺にも妹のような詐欺師的な遺伝子が流れているんじゃないか？

とにもかくにも成功だ、これで人が増えるなんて事はないだろう。

「それじゃあイチ、放課後も頼むからね」

その言葉を残して彼女は教室の方へと戻っていた。

「やれやれ……。しっかし、どうやってやめさせっかなあ……」

口では俺が全部やる、なんて言ってやったが本当の所は農作業なんてやりたくない。

しかし、このままズルズルと続いていけば今ののように事態が悪化するような話になりかねない。かと言ってあいつを止めるような策も思いついていないのが現状だ。

「ほんと巻き込まれ系男子だなあ……俺ってば」

意味の分からない台詞をぼやいてみる。

まあとにかく俺も教室に戻って一眠りする事にしよう。ベンチで横になって寝るのも気持ちよさそうだが、そんな事をしたら授業の時間になっても起きれる気がしないしな。

立ち上がって扉の方へと向かっていこうとした時だった。

右のポケットに入っていた携帯電話がブルブルと震えている。マナーモードにしているから着信音は聞こえないが、どうやら誰かが俺に電話をかけてきたようだった。

携帯を取り出して画面を見ると妹の名前がそこに写っている。

「……もしもし」

『もしもし。兄ちゃん昼間に電話かけてごめんよ』

電話越しでも、何か企んでいそうな妹の顔が脳裏にはつきりと映り込む。

「一体何のようだ？ こんな昼間っから電話なんて珍しいじゃないか」

『まあね、ちょっと業務連絡的な事をしようと思って、珍しく電話をかけてみました』

「業務連絡……？ 何かあったっけか？」

『もうっ。すっかり忘れてるな？ 朝言ってた《兄ちゃんが部活始めた》って話だよ』

「ああ、そんな話してたな。んで、結局どうなったんだ？」

『バツチリだよ。パパ達も納得してくれて、朝早く出ていったのも全然不思議に思ってないから。安心してね』

「よくやった、我が妹よ。お前に任せて正解だったみたいだな」

『うんうん。それでね、ちょっと色々調べたい事があるから、ボクも学校終わったら兄ちゃんのトコに行く事にするね』

「は……？ お前もしかして、あの畑に行くとか言ってんのか？」

『うん、そうだよ？ だって部活に入ってたって言っただいいんだけど、兄ちゃんがどんな部活してるかまでは考えてなくて。それで思いつかなかったから直接相談しようかな』って思っただけ』

「いやいや、そんな事家帰ってからでも出来るだろ。わざわざ来る必要なんて——」

『いいからいいから。学校終わり次第ボクも行くから、それじゃよろしくね』

俺の言葉なんて聞かず、そのままブツリと通話を切ってしまう我が妹。すぐに電話をかけ直すが、携帯の電源まで切ったようで全く繋がらなかった。

「……まじかよ」

何とか姫月を納得させたのに、妹が来たりしたら結局駄目じゃないか。

「やっぱりあいつに話したのは失敗だった……」

あいつの事だ。草むしりが終わってないのを見たら、そのまま『ボクも手伝う!』なんて言い始めるに決まってる。

「どうしたらいいんだよ……この状況……」

頭を抱えて悩みこむ。

事態は悪化していく一方で、好転する気配なんて見せはしなかった。

真っ赤なトラクター

放課後からの農作業が頭をよぎり、時間の流れがゆっくりと感じられていた。

それでも何とか耐えに耐え、俺は気怠い一日の授業を乗り切って例の荒地へと向かう。

姫月は部活動の勧誘を避ける為に一人寂しく教室で待機しているようで、結局は俺一人でしぶしぶ足を進めている訳である。

妹とは昼休み以降連絡はつかず、事態は変わっていないままだった。

とにかく、姫月が足止めを食らっている今がチャンスなのだろう。早いとこ妹を家に帰らせて、バカな真似はやめさせないといけない。昨日通った帰り道を進み、俺は荒地へと辿り着く。

「あ、兄ちゃん。待ってたよ」

案の定畑のど真ん中で、満面の笑みを浮かべながらこちらに手を振る妹の姿があった。

ため息をつきながら、俺は妹に向かって駆け寄った。

「おい、妹よ。お前一体全体なにしてくれてんだ!？」

少し怒鳴り気味に言葉を上げるが、妹はケロッとした表情のまま何も動じる様子はない。

「なにしてくれてんだ、ってボクも農作業の手伝いだよ。ほら、見てよ。体操服もちゃんと着てきたんだから」

そう言って新品の体操服を俺に見せびらかす妹。あどけなさが残

るその笑顔と、白い布に出来た僅かな膨らみ、ハーフパンツの先に見える細くてすべすべな太もも——って何冷静に解説してんだって！ 変態か、体操服姿の妹を見て萌えてるとか、変態なのか俺！？俺は頭の中に浮かぶ煩惱を振り払い、鋭い視線で妹を見つめた。しかし、まあ妹のそんな可愛らしい姿を見せられてしまっただけ、さっきのように怒鳴る事なんて出来はしない。全く、俺は何処までも妹に甘い奴だ……。

「いや……そうじゃなくてだな。とにかく俺の話を聞かないで、何で勝手にここに来てるんだよ。お前は」

「んにゃ」。ボクも学校行く時ここに寄ってみたんだけどね。草むしりは終わってたみたいだけど、その他の事が全然進んでなかったし、電話でも話したけど相談した事もあったから、兄ちゃんの手伝いでもしてあげようかなって思ってみたり」

「手伝いっつうか……そういう事されると逆に困るんだって。お前だって知ってるだろ？俺が農業とかには興味ないって事を」

そうだ、あくまで俺の目的はこの荒地の開拓ではなくて、開拓しようとしている姫月を止める事。だから勘違いはされたくないかった。手伝うならば農作業の方ではなく、姫月を止める為の口実を考えるのを手伝ってほしい。

そんな事を思っていたら妹は額に手を当てて小さくため息をつき、「……なあんだ、ボクはてつきり兄ちゃんがああ赤髪の女の子に一目惚れして、それで何だかんだあって農作業の手伝いをやり始めたと思ったのに」

「一目惚れってお前……。いや、確かにあいつはかなり可愛いけどさ」

前も思ったが、確かに姫月は一目惚れをしてしまってもおかしく

ないくらい可愛らしい。しかし、俺の荒地を開拓するだとか、普段の威圧的な態度が原因で、そういう恋心的なものは一切湧いてはこない。

「それでも朝に二人でおにぎり食べてる時とかすごい雰囲気良かったし、兄ちゃんがあの女の子を押し倒した時は胸がすごくドキドキしたのになあ」

「いやいや！ あれは押し倒したとかじゃなくて、俺がコケただけの不可抗力で——」

——って何でこいつはその事を知ってやがるんだ？

「……あ。口が滑っちゃった」

そう言っただけとらしい笑顔を作って、妹はこの状況を流そうとしたがそんな上手くいくはずもない。

「お前、寝るとか嘘ついて俺達の様子を覗き見してたのか」

「あはは……。その、気になって寝付けなくて」

俺はその言葉でがっくりと項垂れた。

こいつは本当にどうしようもない奴だ。予想を遥かに上回る事をしてくれる。

「……覗きに来てたなら、朝言っただけ俺が部活を始めた作戦はどうなったんだよ？ あそこにずっといたなら、そんな事親父達に話してる暇なんてないだろう？」

「それは大丈夫。兄ちゃんたちがイチヤイチャしてたのは朝の七時くらいの事だし、それから家に帰って部屋に戻って、起きたフリをしてパパ達に説明したから心配しないよ」

なるほど。親父達が妹に騙されているのに代わりない事は分かった。しかし、別の心配事が頭の中にモヤモヤと浮かび上がってくる。

それはこの妹の事だ。俺の味方をすると言って親父達を騙したと思つたら、今度は俺にバレないように畑にやってきてこつそり覗き見してやがるなんて……気になっているとは本人も言っているが、ただそれだけではないのだろう。何かを企んでいるに違いない。

ニコニコしている表情では何を考えているのか読み取れず、その分だけ恐ろしさが十倍増しくらいだ。

何かをされる前に家へと帰さなくてはならない、そう思って体を動かしたその時だった。

「あれ？ イチ、その子誰？」

道路側の方から聞こえる少女の声。誰がいるかは予想がついている。俺の事をイチと呼ぶ奴はこの世界にたったの一人しかいないのだから。

「……間に合わなかったか」

俺は沈む気持ちを抑えながら、声の方へと振り返る。

案の定そこにいたのは藍色の長袖の体操服を着替えた姫月だった。

「こんにちは、お姉さん。今日は一日よろしくお願い致します」

妹は言いながら姫月に向かってペコリと頭を下げる。

「こ、こんにちは……ってゆつか、これって一体どういう事？」

やはり姫月も今の状況が一体どういうものだか分かっていないのだろう。俺と妹を見ながら頭の上に疑問符を浮かべているように見える。

「えっと、ボクは兄ちゃんの――」

俺は咄嗟に言いかける妹の口を手で塞ぎ、姫月には聞こえないよう小さく囁く。

「ばか、余計な事言うな」

そして俺の眼力で『いいか、俺とお前が兄妹だつていうのは内緒だ』と伝えると、妹はそれを理解したのか何度か頷いた。

「え」と、そう。ボクは京一クンの知り合いで、名前は九乃っていうんだ」

「九乃ちゃん……？」

妹が自己紹介をするが、姫月はいまだに状況を掴めていないようだった。

ややこしい話になる前に適当な話をでっち上げなくては……。

「俺が説明するよ、姫月。こいつは俺の家の近所に住んで……なんつかさつき近くで会ったんだけど、そのまま付いて来ちゃったつつか……ええと……」

しどろもどろに説明するが、上手く話を伝える事が出来ない。とにかく妹はたまたまい合わせているだけで、草むしりの手伝いの為にいるわけじゃない。そういう風に姫月に伝えなくちゃいけないのだが――

「そうだよ。付いて来て、そのおまけで農作業のお手伝いをする事になりました！」

なんて満面の笑みで言うもんだから『もうつ、このアホ！』と頭の中で叫ぶ事しか出来なかった。

「手伝って……それって本当？」

姫月の目がキラキラと輝いている。それを見ながら妹も笑顔で答えた。

「うんうん。見た感じだとまだまだ全然みたいだし、僅かながらでも力になれたらいいな」って思つて。ね、京一くん」

「……うん。とってもそうですね」

二人の雰囲気とは対照的に、何処までも気分が落ちて行く俺。

妹よ、お前の売りはどんな時でも的確に空気を読んで、的確な事をしてくれるのではなかったのですか？ と頭の中で妹に問いかける。しかし、そんな問いかけが聞こえるはずもなく、妹は姫月の方へと近づいて行つた。

「それじゃあ今一度。よろしくね、お姉さん。分からない事があつたら、何でもボクに聞いてね。ボクも農業への知識は一通り持つてるつもりだから」

そう言つて妹はニツコリと姫月に微笑みかける。

「ありがとう、九乃ちゃん。あたしの名前は姫月二葉、それじゃあ今日は一日よろしくね」

返すように姫月も笑顔を浮かべていた。

その表情を見ながら俺は鬱になる。

「どうしてこうなつた……」

妹は妹なりに気を利かせているつもりなんだろうが、全てはもう逆効果だ。

俺はため息を付きながら彼女たちの方に近づいて行く。

「ねえ、京一くん。草の方はなくなっただけど次はどうするつもりなんだい？」

「次はどうするって言われてもなあ……」

そついうのを決める権限はあくまで言いだしっぺの姫月にあるわけで、俺がどうするかを決める訳ではない。と言っても普通に考えるなら次にやるのは『野菜を作る環境を整えるために地面を耕す』位なもんだろーが――

「――姫月の予定だと次は何をやるつもりなんだ？」

一応聞いてみる事にする。決まりきった話なのだが、彼女なりの答えを聞いてみようと思つての質問だった。

しかし――

「え、えつと。早速だけど野菜の種を植えて、次のステップに行こうかなつて……」

その言葉で俺はもう一度ため息をついた。

分かつていた事だがこいつには農業への知識がまるでない。

こんなガチガチに固まった地面では野菜が根を張るなんて出来るわけもなく、当然畑をせつせと耕さなくてはならない。しかし、そんな考え自体彼女の頭にはなかったようだ。

「……じゃあ、とりあえずホームセンターとか行つて種でも買ってくるか？」

俺としては別に野菜作りが失敗しようが成功しようがどうでもいい事だ。姫月がそう言うのなら、その言葉の通りに行動してやればいい。それでいつまでも野菜の芽が出ない事に姫月がショックを受けて、そのまま農業をやめてくれるかもしれない。

そつ思つたのだが、俺の策を妨げるように妹が声を上げた。

「だめだよ、いきなり野菜の種なんか植えちゃ。物事には順序つてものがあるんだから」

妹はしゃがみ込み、足元に広がっているガチガチの地面へと視線を落とす。

「あのね、まずはこの地面を耕して、土をもつと柔らかくしないといけない。この状態のまま種を植えても、きっと野菜は作れない。それにこのままだといくら草を抜いてもまたいつぱい生えてきちゃうからね、そうでしょ？ 京一クン」

言いながら妹は俺に向かってニツコリと微笑んだ。しかし、目が笑っていなかった。

心の中で『適当な事言っでないで、ちゃんと教えてあげろよ』と鬼の形相で睨みつけている妹の表情が俺の脳内にダイレクトに伝わってくる。

「あ、はい……」

妹の放つ恐ろしいオーラで俺の体全体に鳥肌が立っていた。本当にこいつをここに来させたのは失敗だったと、今更後悔しても遅すぎる話なのだが、そう思う他なかった。

「そうなんだ……まずは地面を耕して、それでようやく野菜作りを始められるのね」

「そうそう。農業っていうのはすっごく地味な作業の繰り返しなんだ。焦る気持ちも分かるけど、一步步確実に進んでいこうね」

「うん。ありがとうね、九乃ちゃん。教えてくれて」

「いえいえ。ボクは当然の事をしたまでで。ね、そうだよ、京一クン」

「あ……そうだな、やっぱり順序良く進めて行かないとな。あはは……」

俺の計画からずれにずれ、結局は正しい次のステップへと事が進んでしまっていた。しかし、まだチャンスはある。このチャンスで奴らを食い止めねばならない。

そのチャンスとは『一体どうやって土を耕すのか』というものだった。手で土を掘り起こすなんて事は当然出来ないし、耕す為の道具だってここにはない。ならば必然的に次の作業には進めないという事になる。

「でもさ、どうやって耕すっていうんだ？ 耕すための機械だってないし、シヨベルもクワもないぜ？ これじゃあどうしようもないだろ」

ふふふ、どうだ？ 流石の我が妹でも、そんな所まで準備が行き届いているはずも――

「――それは大丈夫。ボクがしっかりと用意してきたから！」

そう言っつて自信満々の表情で、妹は荒地の端っこを指差した。その先にあるのは人数分のクワだった。

ここに来てからそんな物があるだなんて全く気が付かなかった訳だが……一体どうやってこんな物を用意してきたっていうんだ？ 使い古されている物のようだし、何処から持ってきたとは思えない。

「まさか……お前……」

「うん、そうだよ。お家から持ってきたんだ」

「……マジかよ」

わざわざ学校から帰ってきて、その後に人数分のクワを用意してくるなんて……いくら何でも準備が良すぎるっていう話だ。

「つつか、本当にクワだけでここを耕すつもりなのかよ？ 草むしりは何とか終わらせたけど、流石に荒地全体を耕すだなんて出来る気がしないぞ？」

親父が数十馬力もあるトラクターで地面を耕している光景なら見た事はある。しかし、クワだけを使って畑を作るだなんて無理に決まってる。

「ボクはクワだけで畑を作るだなんて、そんなの一言も言っていないけどな。その準備だって大丈夫だよ。そろそろ来る頃だから」「はあ？」

妹の訳の分からない言葉に首を傾げた時だった。遠くの方から聞こえるブルンブルンというけたたましい音。その音は徐々にこちらの方へと近付いてくるようだった。

「何の音だ、これ……」

近付いてくる異音の正体を確かめようと、俺は道路の方へと目を向ける。

そして道路の先から見えるその物体。住宅街には似合わない赤い車体を輝かせ、どっしりとした姿でこちらに向かって走ってくる異音の正体。

「……ト、トラクター！？」

真っ赤な車体、馬鹿でかい図体、装着された四つの巨大なタイヤ。間違いなくそれはトラクターだった。

辺りにここ以外の農地はない。そうするとあのトラクターは間違いなくこの場所に向かって近づいているのだろ。しかし、妹はどうやってあんなデカブツを呼び寄せたんだ？ あんなピカピカの新品トラクターなんて、それなりの規模を持つている俺の家にもないものだ。

「えへへ、すごいでしょ。無段変速の機構を搭載した五十三馬力の最新型トラクターなんだよ！！　すごいよね、ロマンを感じるよね！」

「いやいや、感じねーから。つうか何で興奮してんだよ。ちょっと怖いぞ、お前」

「少しくらいいいじゃん！　人には色んな趣味嗜好があるんだから！」

言いながら目をキラキラと輝かせ、荒地へとたどり着いたトラクターを眺める妹。

俺はそんな妹を見ながら、額に手を当てため息をついてみせる。そうやって俺が呆れているのをよそに、妹はトラクターに向かって近づいて行く。

「いや、悪いね。こんなすごいものわざわざ持つてきてもらっちゃって」

助手席に乗っている若い男の人に妹が声を掛けると、

「いえ、これも仕事の一環ですから」

ただそれだけを言って、トラクターは荒地の中へと入り始めた。

「ちょ、おま……これ一体どうなってるの？」

正直言つて全く状況が掴めなかった。

トラクターは有無を言わず地面を耕し始め、あつという間にガチガチに固まった地面は柔らかなものへと変えてしまう。

俺と姫月はその様子を淡々と眺めていた。その横では妹がトラクターを見ながらはしゃいでいる。

「ねえ、イチ。これって一体どういう事なのかな」

「全く分からん。完全に蚊帳の外だ」

完全なる妹の独壇場。ありえない、一体お前は何者なのだ。妹よ。

「いやゝ。これぞ天豊院てんほういんの権力って感じがするねゝ。これくらいちよちよいのちよいつてもんだよ」

「あ……？ 天豊院って…… どうかで聞いたような事があるような……？」

俺が聞き返した直後、妹はまた口を滑らしたのを誤魔化すように口に手を当てて、

「あ……うっん、今は無し。ごめんね、聞かなかった事にしてっ」

なんて言いながら作り笑顔を浮かべた。

やれやれ…… 小さい頃から変に大人びているところはあったが、何やらこいつは俺に色々と隠し事をしているらしい。

その『天豊院』だとか新品のトラクターを持ってきた事だとか、問い詰めたい気持ちもあるが俺はあえて何も聞かなかった。

正確には、その先の事は俺が知ってはいけないような事のような気がして…… 何一つ言葉が出なかったただけなのだが。

「まあ、とにかくこれで耕すのは終わったね！ よかったよかった」

作物を作るための準備が出来た地面を見ながら、妹は嬉しそうに声を上げる。

俺としてはちつとも良い事じゃなかった。これでは本当の意味での農作業に着手してしまふ。野菜や花なんかと面と向かって作業する事になるなんてまっぴらごめんだ。しかし、そんな俺の気持ちなんて妹や姫月が知る由もなく――

「これでいっぱい野菜を作れるね、姫月さん！」

「な、何だかよく分からないけどありがとう。それじゃあ早速何を作るか決めて――」

途中で俺は二人の会話を耳からシャットアウトする。

もはやどうしようもない、全ての下準備が済んでしまったのだ。こんな状況にまでなってしまうて、今更農作業をやめさせるだなんて出来る訳がない。

どうしたらいいのか分からない。既に理解の範疇を超えていた。とにかく分かる事は一つだけ。

姫月と妹は俺を農業の世界へと引き釣り込む魔王そのものだったという事だけだ。

「はあ……俺ってばこれからどうしたらいいんだろう……」

可哀想な、泣き声に近いような声でそう呟く。

女神様、もしいるなら私めに慈悲を下さい。あの魔王たちを打ち滅ぼす為の術を、この地獄に似た状況から逃れる術を……どうか私めに……。

「……一体イチは何をブツブツ言ってるのかな」

「さあ、トラクターに見せ場を持っていかれて悲しんでるだと思っ

よ？」

ちげーよ、全然ちげーよ。そもそも地面を耕すのに見せ場なんてねーよ。俺が悲しんでいるのはそうじゃないんだ。いい加減分かれ、気づけ、そして俺を解放しろ。このままじゃ俺の心が死んでしまう。新しい人生が始まった途端に終わってしまう。だから――

「――仕方ないわね。じゃあイチの願いを聞いてあげよつか」
「……え？」

俺は姫月のその言葉に耳を疑った。
聞いてくれる？ 本当に？ 俺をこの状況から助けだしてくれる、
そう言つて――

「――ホームセンターで野菜とお花の種買つてきて。どれを選ぶのかはイチのセンスに任せるから」

「やったね、京一くん！ 見せ場が出来たじゃん！」

二人のその言葉で意識が遠のいていきそうだった。
やっぱそうだ。俺はこのまま奴隷として一生こき使われる、
そういう事なんだ。

「……はい」

俺は力なく返事をして道路の方へと向かっていく。

もう……俺の心は消し飛んでしまう一歩手前、もはや風前の灯火だった。

現れた三人目

何だかんだで俺はホームセンターの目の前に立っていた。

トラクターが突然現れた事やら何やらで、俺はすっかり呆けてしまっていたようだ。

財布の中の残額は僅か五十六円、俺はお金がないのを忘れたまま店に来てしまっていた。

「五十六円で一体何を買えるっていうんだろうな……」

店先に並べられた花たちを見ながらそう呟く。

今更お金を借りに戻ろうなんて事もしたくないし、どうしたもんかと頭を抱えた。

「とりあえず……店の中に入るか」

こうやって店の前でウダウダしていても何も始まらない。もしかしたら五十六円でも買えるようなものがあるかもしれないと、俺は店の中に向かった。

しかしまあ、二桁の所持金額で買えるものなんてあるはずがない。当然のことながら姫月に頼まれた野菜や花の種なんか手が届かない値段だった。

「種に分際で三百円近くするのかよ……」

値段が書かれた札を見ながら俺は嘆いた。

このままじゃ手ぶらで帰る事になってしまう……それだけは避けなくてはいけない。

店先に並べられた花とか野菜の苗とか、もしかしたら日が経ちすぎて半額になっている物とかあるかもしれない。そういう期待を込めて俺は店先の方へと戻った。

「案の定、あるわけないよなあ。そんなもの」

当たり前の話だった。五十六円で買えるものなんてある訳ない、俺ってホント馬鹿。

店先を眺めながら俺は大きくため息をつく。

「一体何で俺がわざわざやりたくない農業の為に、必死になって種とか苗を探さなくちゃなんのだ」

そもそもこれは俺の買い物ではないのだ。義務でもないし、ただただあいつらに頼まれてやってるだけの事。よくよく考えてみれば、俺がお金を使う必要は何処にもないのだ。

「でも、だからと言って今更戻るのもなあ……」

お金を渡してもらおうにも、わざわざ戻るなんて事はしたくはない。電話で話したところで『帰って来た時に、その分のお金を渡す』と言われてお終いだろう。そうなれば五十六円しか持ってなくて、何にも買えないって事がバレてしまう。出来れば俺のプライドを守る為にも、二桁しか所持金がないなんて知られたくはなかった。

「やつすいプライドだなあ……俺」

がつくりとうな垂れる。

タイムアップのぎりぎりまで粘って『俺の欲しかった物が一つも売ってなかった』とか適当な事でも言おうか。妹がいるからその程

度じゃ言い逃れ出来そうにないが……。

「……って、あれ？」

店先を眺めていて気付く。

鉢に植えられた売り物の花を見つめながら、携帯電話を弄る少女の姿。腰まで伸びた金髪、何処か見覚えのあるその容姿。

「あれって、うちの学校の制服だよな。そっぴやあの子って——」

そこにいた少女は、黄昏るように窓の外を見つめていたあの留学生だった。

周りには客も店員もいない。明らかに俺と彼女、二人だけのこの状況。是非ともお近づきになりたいと、心の底から思っていた俺には絶好のチャンスだった。

ゆっくりと彼女に向かって近づいて行く。

彼女はどうかやら花に夢中になっているようで、俺の事など全く気付いていないようだ。彼女の後ろに立ち、決心するように大きく息を吸い込み俺は言葉を発する。

「え、エクスキューズミー？」

彼女は留学生、日本語で話したってきつと通じない。

だからこそ、グローバルな英語で話しかけたつもりだったのだが

「——いきなり何ですか？ あなた」

振り向いた彼女が放つ日本語があまりにも流暢なもので、いやもつと別の言語の空耳なんだとか、もしかすると俺にはバウリンガル

的な才能が秘められていて、英語が日本語に聞こえちゃったんだとかそう考えてみたのだが――

「……よく分からないですけど、どうやら不審者みたいですわね」

彼女は携帯電話のダイヤルを『110』と押し始め、

「うおっ！？ 違うから！ 全然不審者とかじゃないから、そのほらえーと何つつか――」

自分でもびつくりするくらいのキョドリっぷりだった。

その様子を見ながら彼女はため息をつき、持っていた携帯を折りたたむ。

「はあ。それなら一体なんですか？ もしかしてナンパですか？」

いかにも嫌悪感で満ち溢れたような目で俺を見るもんだから、こりやもう第一印象最悪だな、もう終わったな俺、とか色んな考えが脳裏に浮かぶ。それでも何とか挽回しようと頭をフル回転させて、目に付いたのが彼女の持っている鉢に入った花だった。

「あ、その花って……確かマーガレットだよな」

「え？」

彼女は首を傾げながら持っている花へと視線を落とす。

「えーと、確か、花言葉は真実の愛とか恋を占う、とかそんな意味だったっけか」

言いながら思う、我ながら何気持ち悪い事言っちゃってんだと。

ナンパするにしても突然持つてる花について語り始める奴なんて、誰がどう見たって気持ち悪いと思うに決まってる。いくら可愛い女の子を目の前にしてキョドってたとしても、流石にこれは酷かった。自分で思い返してみても完全に不審者だ、コレ。

「……もしかして、あなた」

俺が思っていた反応と全く違うものが返って来た。
彼女は開いた携帯を真剣な眼差しで見つめ始める。

「あなた、名前に数字の『1』が入っていませんか？」

予想外の反応に俺は少しだけ戸惑っていた。

「い、いち？ ああ、そうだな。入ってるな。京一だし」

「……まさか、本当に」

携帯を持つ彼女の手が何故だか震えている。

「や、やっぱりそうです……！！ この占いは本当だったのですね」

彼女は俺へと携帯の画面を向けた。どうやら何処かのウェブサイトが開かれているようで、アイコンやら文字やらが所狭しと並べられている。

「これって、占いサイトか？」

サイトに書かれた運氣とか星座に関する項目。彼女の言う事から考えても、このサイトは占いに関するものだというのが一目で分かる。

「ええ、そうです。今開いているそのページをしっかりと読んでみてください」

一体何を言っているのか定かではないが、なかなかの好感触だった。このまま上手く会話を続けていけばものすごく仲良くなれる気がする。

俺はそのページに書かれた内容に目を通す。

『乙女座のアナタ。今日はとても大切な一日になる事間違いないです。運命の人が目の前に現れたり、思わぬ大金が舞い込んできたり……。ラッキーアイテムはマーガレットの花、ラッキーワードは数字の『1』です。これでアナタも幸せものになっちゃおう』

読み終わって思う。一体何書いてんだ、この占いサイトは。

『運命の人に出会える、大金が舞い込んでくる』とは大きく出たもんだ。普通の人間だったらこんな内容信じたりはしないもんだが、彼女の様子を見る限りどうやらどっぷり信じ込んでるようだった。目をキラキラさせながら俺の事を見つめているし、ここは良い印象を与える為にもあまり変な事は言えないだろう。

「そっかー、運命の人に出会えるかあ。乙女座の人は今日一日最高の運勢だったんだろうな。うん、すごいすごい」

「そう。わたしは遂に運命の人に出会えたんです」

そう言いながら彼女はずっと俺の眼前にまで顔を寄せる。

「イチ様、あなたがわたしの運命の方だったのですね」

「え……？ それってどういう事？」

この子はもしかして、占いサイトに書いてある数字の『1』だと

かマーガレットの花だとかで、運命の人が俺だと思い込んでる訳？ いやいや、そんな事ある訳ない。そんな簡単に運命の人に出会えるなんて――

「――イチ様、わたしはあなたにずっと前からお会いしたいと思っていました」

彼女は俺の体をぎゅーっと抱きしめる。同時に広がる甘い香りと、柔らかな彼女の体。押し付けられる彼女の胸……ってなに？ 何なの、この状況！？

気づけば周りには、他のお客さんの姿や店員の姿がある。しかも、店先でこうやって抱き湿られてるもんだから俺達は彼らの注目の的になっていた。

「ちょ、ちょっと待て？ 人前でこれはちょっとまずいって」

彼女とお近づきになりたいとは思っていた。しかし、これはいくら何でも大接近しすぎだ。嬉しいけど予定が違う、もっとこう緩やかに仲良くなりたいと思っていたのに。

「周りの人間なんて眼中にありません。今はあなた、イチ様以外には何も見えないです」

そう言っただけで彼女は俺の事を離してくれようとはしない。

まずい、本当にまずい。地元の知り合いだとか、高校の同級生なんかは今の状況を見られてしまったら、次の日から色々な噂が飛び交うに決まってる。

そしたら、姫月にも妹にもそれを知られてしまって、そしたらきつともう最悪な目に――

「——そんな所で一体何してるの、阿賀野京一くん」

聞き覚えのある声が俺の耳に飛び込んできた。

抱き締められ身動きの取りにくい状態で、それでも首だけを動かして声の方へと視線を移す。そこにいたのは姫月だった。不機嫌そうに両腕を組み、俺のことを睨みつけている。

「なかなか来るのが遅いと思って来てみたら……まさかこんな事してるなんて」

「いや、その……これは何ていうか、不可抗力で……」

「……キミはその不可抗力って言葉が好きよね。あたしの事を押し倒した時もそうだったし、不可抗力で女の子と抱き合うなんてあるわけないじゃない」

姫月の視線が痛かった。ちゃんと理由を伝えたかったが、今この状況で何を言っても全てが全て裏目に出てしまいそうだ。

「……いきなり現れて何ですか、あなた。イチ様の知り合いか何か？」

「そうよ、ただの友達。ただの友達だけど、文句ある？」

二人の女子が俺を挟んで、目と目を合わせ火花を散らしていた。

渦中の人間でありながら、俺は全く状況が掴めていない。二人の様子を見ながら『なにになに、何なのコレ？』と必死に頭の中で考える他なかった。

「どうでも良いんだけど、あたし今イチに用があるの。だから早く離れてくれないかな」

「用があるなら、まずイチ様の恋人であるわたしを通してからです」

「……こ、恋人？」

姫月はその言葉に驚きを隠せなかったようだった。

「イ、イチって付き合ってる人がいたの？」

「いやいや！ 年齢〓付き合った事がない年数だから！ 全然恋人とかじゃないから！」

「でも、その様子を見てたら……ねえ？」

完全に誤解されている……。いや、こんな状況を見て誤解するなんて無理な話なのかもしれないが、とにかくこの誤解を解かなくちゃいけない。

「えーと、今俺に抱きついてるこの子とはついさっき知り会ったばかりでさ、まだ恋人だとかそんな間柄になるわけないつつうか、その――」

「――へえ。知り会って間もない女の子とすぐに抱き合うなんて、イチって相当軽い男だったんだ」

完全に逆効果だった。姫月は今まで以上に鋭い視線で俺の事を睨みつける。それがとても痛々しくて、もう姫月の事を直視なんて出来やしない。

「いやいや、まさか京一君が軽い男だったなんて。ボクまでシヨツク受けちゃうよ」

聞こえてくる声の方に視線を移すと、そこには俺のよく知る妹の姿があった。

「九乃……お前まで」

まずいますい、妹にまで見られてしまったなんて大惨事だ。俺は

今日から一体どんな顔してあいつと暮らしていけばいいんだ……？
そんな心配をよそに何か興味津々な表情で俺達に近づいてくる我が妹。ニヤニヤとしているその表情からは明らかに何か企んでいるという事が容易に想像できる。

俺達の目の前にまで来たと思うと、九乃は抱きついている彼女の方を見つめた。

「ミイナ。こんな所で一体何やってるんだよ？」

「あ、九乃。一体何もないです。見て分かりませんか？ わたしとこの方に結ばれた赤い糸が」

「……赤い糸って全然見えないけど、また占いかなんかの影響だよ。ね。それ」

妹は呆れたように言葉を返す。

「まさかお前ら知り合いなのか？」

聞いておいてなんだが、お互いの名前を知っていてこれで知り合いないなんてある訳ない。

そしてそんな予想通り妹は頷いて、

「そうだよ。この子の名前は『天豊院ミイナ』で、ボクの昔からの知り合いなんだ。まあとにかくちょっと、ボクの京一くんから離れてくれないかな？」

そう言っ て妹はミイナと呼んだ彼女の腕を掴み、そのまま俺から彼女を引き剥がす。

「ちょっと待ってください！ 九乃、いきなりなんですか？」

「いきなりも何もないってば。こんな人前で男の人に抱きつくなんて、不純異性交遊だよ、こんなのミイナのパパ様に知られたらものすごく面倒な事になっちゃうよ」

「パ、パパに知られたら……それだけはちょっと無理です」

「でしょ？　じゃあ、ちょっと落ち着かなきゃ」

どういう事だか分からないが、九乃の言葉でミイナはすっかり大人しくなってしまった。

「あのさ、これってつまり……いや、何の事だかさっぱり……」

「あゝ、ええとね。あんまり気にする必要はないよ。ちょっとミイナは思い込みが激しいっていうか、何でもすぐ信じこんじゃうっていうか……まあとにかく占いとかに狂信的な性格で、それで兄ちゃんが巻き込まれちゃっただけだから」

「まあ思い込みが激しいっていうのは良く分かったけど……そもそも、どうしてお前がこの子の事知ってた？　歳だって全然離れてるわけだし……」

「まあボクは顔が広いからね。ここぞという時にその人脈を発揮するのさ」

妹はまた得意げな顔をして、両手を腰に付き「えっへん」とわざとらしく言ってみせた。

顔が広いっても、一介の中学生が留学生であるはずの彼女と知り合いだなんて、流石に信じられるような話ではない。それに彼女の名前、天豊院ミイナ。何処かで聞いた事のある名だった。

「そっぴや天豊院って、トラクターが畑に来た時に九乃が言ってた名前じゃあ……」

妹は『これぞ天豊院の権力って感じがするね』だとか言っていたはずだ。

もしその言葉の通りならこの子は――

「その通りです。わたしは天豊院グループの社長、天豊院よしかず義和の一

人娘、天豊院ミイナ。以後お見知りおきを」

そう言って彼女は丁寧な頭を下げる。

「天豊院……いや、何処かで聞いた覚えがあるとは思ってたけど、まさか——」

——思い出した。天豊院、日本でもトップクラスの大企業。世界でも五本の指にまで入るとされる規模を誇り、工業や農業などの様々な分野に進出し、ありとあらゆる業界で上位に君臨しているとしても企業の名前。

「——まさか、本当に、天豊院グループの会長の一人娘とか……嘘だろ？」

「嘘なんかじゃないです。なんなら、その証拠を今お見せしましよつか？」

ミイナは今俺達がいるホームセンターの看板に向かって指を差す。

「このお店も実は天豊院グループの傘下なんです。わたしが許可さえすれば、店内の商品を全て無料でお渡しするという事も可能なんです」

「え……まじで？」

俺は店先から店内の様子を眺めた。

農業関係の物には興味はないが、電化製品やら毛布やら日常生活で使えるようなものは是非とも頂きたい。

そう思っ『いいのか？ 本当にもらっちゃって』なんて言おうとしたら、姫月がその言葉を遮るように声を上げる。

「こら、イチ。ミイナさんはそう言ってるかもしれないけど、本当にもらうだなんて事出来る訳がないでしょ」

「いやー、もらえるものはもらった方が得だと思っしな」

「そうです。イチ様にだったらわたしはどんな物でも差し上げます」

ミイナは何故だか恥ずかしそうにそう言っただけ頬を赤く染める。

どうしてこんなに好かれてしまったのか、本当に占いサイトのおかげなのか、ミイナの言う通りまさしく俺が彼女の運命の人間だったのか……とにかく大企業の会長の一人娘とここまで仲良くなれるだなんて、人生最大のチャンスには違いない。

「ふっ、玉の輿か。悪くない、悪くないぜ……」

俺のその言葉に呆れたのか、姫月はわざとらしくため息をつく。

「ねえ、イチ。玉の輿っていうのは女の子がお金持ちの男の人と結婚する時に使う言葉だから。キミの場合は逆玉——ていうかそんな話じゃなくて、あたしはもっと大切な話の為に来たんだから！」

「ああ、そういう俺に用があるって言っただけだっけ」

「そうだよ。その為にわざわざ九乃ちゃんと一緒にここまで来たんだから」

姫月はおもむろにカバンの中へと手を伸ばす。

彼女が取り出したのは財布だった。千円札を一枚手に取って、それを俺の方へと向ける。

「はい、これ。あたしも千円しかなくて悪いんだけど、これで野菜の種を買って欲しいの」

「……あれ？ それってどういう事？」

「九乃ちゃんから聞いたんだよ。一昨日九乃ちゃんに買い物頼まれて、それで今は財布の中にお金が全然ないんですよ？ だからお店でイチが困ってないかなって心配してたんだけど……」

「い、いやいや！ 財布の中とかめちやくちやお金入ってるから！
五十六円しかない訳ないじゃん！ そ、そんな心配しなくても――
――」

――焦って否定した結果がこれだよと、俺は心の中で呟く。とんだヘマをしたものだ、わざわざ五十六円しか持ってないって公言してしまうんだもの。もう余りの恥ずかしさで、穴があいたら入りたい、今すぐにでもこの場から逃げ出したくなった。

「なるほど。イチ様はお金の面で大変な目にあっていたのですね。心配なさらないでください、天豊院グループ全勢力をもってイチ様をバックアップしてみせます！」

待ってくれ、そんな大それた話じゃないんだよ、ミイナ。

「そんな、グループ総出なんてズルいじゃない！」
ズルイって一体どういう話だ、姫月。

「ボクもちゃんと取っておいたお年玉があるよ！ みんなには負けないから！」

一体何処からそのお年玉袋を取り出したんだ、我が妹。

そしてそんな三人の様子を眺めながら思うのだ、どうしてこいつらそんなに俺にお金を渡すのに必死になってるのだと。

「……分かった、分かったよ、何もかも俺が悪かった」

観念した。もはや隠し事など許せないだろう。

俺はそつとカバンの中に手を入れて、がそこそと中を探った。

お目当てはただ一。何かあった時の為に、非常用として持つている大切なもの。

銀色のメガネのケースのような箱を手にとって、俺はその箱をゆっくりと開く。

「あれ？ 兄ちゃん、それって……」

俺が取り出したのは一万円札だった。本当に困った事態に遭遇した時の為の、いわば俺にとっての最終兵器だった。

「お前らの気持ちだけは受け取っておく。でも、男が女から金を借りるだとか、お金を渡してもらうだとか、そういうのは俺のプライドが許さないんでな」

俺はその一万円札を片手に、自動ドアをくぐり店内へと入っている。

最初から悩む必要などなかったのだ。最初からこうしておけば、誰かが争う事もなく平和的に終われたのだ。

後悔の念に負われながら、俺は野菜の種の入った袋にそっと手を伸ばす。

「これでいい、これで皆の争いが止むのなら、俺は——」

「——ねえねえ、兄ちゃん。カッコつけてるとこ悪いんだけどさ、ちよつといいか？」

「な、何だよ妹。今イイところなんだから、横槍いれんなよ」

「いやいや……イイところだってのは察するけど、流石のボクでもそのお金を使わせるのは悪いというか、そのお金に手を出して欲しくないっていうか……」

「……確かに使いたくないのが本音だけど」

手に持っている一万円札へと視線を落とす。

十年前くらいの、旧札の一万円だった。それでもシワ一つなく、日焼けも汚れも何処にもない。それは俺がそのお札を大切にしていたその証拠。

「そうでしょ？ ボクだってそのお金がどれだけ大切なものなのか知ってるし、そんなお金を使わせるわけにはいかない。ここはボクに任せてよ、みんなの内で誰にもお金を使わせないで、それでもちゃんとその野菜の種もちゃんと手に入れてみせるから」

そう言って九乃は俺の持っていた種の入った袋を取り上げる。

「ちょ、誰のお金も使わせないって、まさかお前万引きでもするつもりか？」

「そんな訳ないじゃん。まあ見てなって」

「まあ見てなって言われても……」

お金を払わずどうやって品物を手に入れるんだ？ 汚い心の俺には万引きくらいしか思いつくものがない。もしかしてこいつ、また俺の知らない人脈を使って、タダで商品を手に入れるつもりじゃあ

「——ねえねえ、ミイナ。京一くんがこの野菜の種欲しがってるんだけどいいかな？」

「いいですよ。イチ様の為なら、一つと言わずいくらかでも」

「だってー、京一くん」

思わずズッコケそうになった。

あれだけ言っというて結局はミイナの力を借りるのかよ！

「だって、嘘はついてないよ。このお店がちょっと損するだけで、みんなのお金は一円も使っていない訳だし」

「まあそうかもしれないけど……」

「いくらでもって言うてるし、せつかくだから何種類かもらっていいこうよ。ボクは茄子とか作ってみたいな。あとキュウリも」

妹はそのまま野菜の種が入った袋をいくつも回収する。気付けば持ち切れない程の袋を抱えて、妹は嬉しそうにニコリと笑う。

「ありがとう、ミイナ。これで明日から本格的にやっていけそうだよ」

「いえ、イチ様が喜んでくれるならわたしはそれが本望です」

新品のトラクターをわざわざ貸し出してくれるくらいの人間だ。一つ数百円くらいの品物くらいどうって事はないのだろう。

「それでも……本当にこれだけもらって良かったのかな。イチ、どう思う？」

不安そうな表情を浮かべている姫月を見て、俺も少し考える。

「まあ確かに、ミイナがいくら良いつて言っても店の人には迷惑がかかるだろうし、これからはこういうのは無しにしないと、うん」

もらえるのはもらった方がいい、なんて言った奴のセリフじゃないと思うが、姫月の言う通りミイナの好意に頼りすぎるのは良くない。あまりにも頼り過ぎたら感覚が麻痺してしまって、そのうちきつとんでもない注文だって始めるかもしれない。

「本当にありがとうな、こんなにもらっちゃって。この恩は必ず返すよ」

「ふふっ、やはりイチ様はとても心優しい方なのですね。わたし今のもっとあなたの事が好きになりました。どうかこれからもわたしと仲良くしてくださいね」

そう言っミイナが見せた笑顔が可愛すぎて、俺の事をもっと好きになってしまったっていう言葉の破壊力がやばすぎて、俺の顔はもう真っ赤になっていた。

「……姫ちゃん、なんか面白くないね」

「うん。全然面白くない」

不機嫌そうな表情を浮かべる外野が二名。

ふ、好きなだけ言うがいい。今の俺は幸せ大絶頂、ミラクルハッピーな状態にある。何を言われようが痛くも痒くもないぜ。

「イチ様、今日は会う事が出来て良かったです。わたしはそろそろ帰らなくてはいけない時間ですから、また明日もわたしと遊んでください」

「ああ、もちろん喜んで。俺も明日を楽しみにしてるぜ、ミイナ」

「はい、それではまた明日！ お二方もまたよろしくお願いします」

ミイナはペコリと頭を下げて、そのまま店を出ていった。

可愛いだけではなく社長令嬢で、おまけに性格まで良いだなんてパーフェクトすぎる。

あの占いサイトには感謝しなくてはいけない。こうやって俺と彼女を巡り会わせてくれたのは、全てあのサイトのおかげなのだから。

「……ミラクルハッピー状態で、頭がヘブンなこの人の事は置いと

いて。もうボク達も帰ろつか、姫ちゃん」

「うん、そうする。頭がほんわかしてるイチの事なんて放っておこ」

二人の会話はちゃんと聞こえていたがあえてスルーする。そのほんわかミラクルハッピー状態な俺には、明日からのミイナとのスクールライフで頭が一杯なのだ。

「……ああ、そうそう。明日も朝の六時に畑に集合ね。絶対遅れないでね、イチ」

「そうだよ。一秒でも遅れたら罰金だから」

「はいはい、六時でも五時でも何でもオッケーだつつの。俺に何でも任せとけ」

そう、今なら何でも出来る気がした。

スコップ片手に地殻を掘り進み、マントルと核を突き抜け地球の裏側にたどり着く事だって不可能じゃない。そう思ってしまう程に今の俺は絶好調だった。

明日よ早く来い、もう一度ミイナと話せるのを想像しただけで俺の火山が噴きかける。別に下ネタではない、俺の全身を駆け巡るマグマが彼女と話す事を欲しているのだ。

「ふ、お前らも俺みたいに良い相手を見つけて立派な玉の輿に乗れるよう努力するんだな、って——あれ？」

振り返ってようやく気付く。

姫月も妹はもういない。周りには白い目で俺の事を見る客が数名と、気まずそうに俺を見つめる店員の姿しかない。

「……俺も帰るか」

急激に冷え始めたマグマの熱を感じながら、俺も店の外へと出ていった。

明日の朝も早い。家に帰ったらちっちと寝る事にしよう。

何事にも下準備は大切です。

今日も姫月との約束を守るため、俺はきつちり朝の五時に起きていた。

だるい体を起こしながら朝の支度を始める。

妹はまだ起きてきていないようで、家の中は俺だけの静寂に包まれていた。

寝る前に妹の部屋に行つて「お前も明日朝から来るのか？」なんて聞いてみたのだが何故だか妹の奴は機嫌を損ねているようで反応なんかしてくれない。

大企業の社長の一人娘と、ただの農家の娘である妹がどうして知り合いだったのか、色々と聞いておきたかったのだがあの雰囲気じゃ答えてはくれないだろう。

「ていうかそもそも、大企業の一人娘がどうしてこんな田舎にいらんだろうな……」

これは単純に俺のイメージで決め付けなんてするのは良くない話かもしれない。しかし、ミイナのような上流階級な人間は、都会のもつと名の通った高校に進学するのが普通だと思うのだ。しかしまあ、そのおかげで彼女と出会う事が出来た。

理由は定かじゃないが、彼女をこんな田舎に連れてきてくれた人物には色々と感謝すべきだろう。

「今日は朝飯食っていくか。流石に二日も連続で姫月に飯を食わせてもらうのは悪い気がするし」

キッチンに行つて冷蔵庫の中を探ると、朝飯に丁度良さそうなプ

リンやらパンが出てくる。しかし、俺だって学習はしている。これがもし妹の買ってきた物だった場合、勝手に手をつけるのはアウトなのだ。また夜遅くにコンビニまで走らされるなんて目にはあいたくない。

適当にハムと卵を手にとって、ハムエッグの調理を開始する。

ご飯は昨日の余ったのが炊飯器の中に残っているし、インスタントの味噌汁だってある。

朝飯としては十分すぎる内容だ。これなら朝の農作業にもしつかりと耐えられるはず。

朝飯を作り終えた俺は椅子に座ってテーブルの上にある料理を見つめる。

「我ながらいい出来だ。さつとと、それじゃあいただきます——」

両手を合わせ箸に手を伸ばそうと思った時だった。

「……兄ちゃん。ボクのおねがい」

眠そうにキッチンへと入ってきたのは妹だった。

「何だ、結局お前も起きたのかよ」

「姫ちゃんに朝来るように頼まれたのは兄ちゃんだけじゃないもので」

あくびをしながら妹も椅子に腰をかける。

「……兄ちゃん、お腹へった」

「冷蔵庫の中にプリンとかパンあったぞ。あれお前のだろ、それを食え」

「やだ。ボクもハムエッグとお味噌汁とご飯が食べたい」

「……卵もハムも、インスタントの味噌汁も冷蔵庫に入ってるぞ。あとご飯は炊飯器の中」

「やだ。兄ちゃんに作ってもらいたい」

あああ！ わがままばかり言いやがってこいつはもうつ！！

心の中で叫びながら俺は立ち上がり、もう一度朝飯の調理を開始する。

何度も言うが俺は妹に甘い。だからといって勘違いされたくはないのだが、俺は決してシスコンでもロリコンでもないのだ。そこはよく理解してもらいたい。

まあハムエッグなんて簡単に作れるし、味噌汁もお湯を注ぐだけ、ご飯なんて皿に盛るだけだ。妹の分の朝飯を作り終え、俺は椅子に座って自ら作った朝飯に箸を伸ばす。

「兄ちゃん、醤油」

「はいよ」

いつも通りのやり取り。いつも通りの光景。それでも何か雰囲気がおかしい。

ご飯を作ってやったにも関わらず、不機嫌そうにムツとしている表情の妹。

そっぴいや昨日の夜も様子がおかしかったけ。心当たりがないわけじゃないが、一応確認しておくことにしよう。

「なあ、妹よ。どうしてお前そんなに機嫌が悪そうなんだ？」

「……自分の心に問いかけてみるといいよ」

「自分の心にねえ……」

やっぱそうか、昨日の事が原因で機嫌を悪くしてるんだな、こいつは。

「悪かったよ、その昨日の事はさ。財布の中に五十六円しかないのを黙ってて、お前らに迷惑をかけちゃったよ。今日からはちゃんとお金を持ち歩くから、ほんとすまなかったな」

そうだ。姫月にも九乃にもミイナにも色々世話になってしまった。きつと九乃の機嫌が悪いのもそれが理由なのだろう、そう思ってた謝ったのだが――

「……鈍感」

妹はそう言っただけで食器を持って立ち上がり、流し台に向かって歩いて行く。

「あれ、もう食べ終わったのか？」

「うん、ごちそうさま」

あっさりそれだけ言って、妹は流し台に食器を片付けそのままキッチンから出ていった。

「……何だよ、せっかく謝ったのにあの態度は」

いやまあ、俺も俺で謝る側の態度ではないと思うが納得行かない。ていうか今までなら兄ちゃん兄ちゃん言ってくっついてくるくらいで、喧嘩したって俺が謝ればすぐに許してくれるはずなのに。

「鈍感って……何がどう鈍感なんだつつの」

全く分からん。妹みたいに頭は冴えないが、鈍感なんて言われるような覚えはどこにもないのだ。それともこれはいわゆる『兄離れ』というやつなのだろうか？ 昨日の事で俺に呆れて、今後一切は兄には関わらないようにしようという態度の現れなのだろうか？

「……兄離れだっというなら、それはそれで仕方ない事だ。あいつもあいつで徐々に大人になっていくんだから」

少し寂しい気持ちを感じながら、俺も食器を流し台の方へと持っていく。

母に怪しまれないよう、ちゃんと食器を綺麗に洗って棚に戻し、俺は出かける為の準備を再開した。

今日は昨日より早めに畑に到着しなくてはならない。

六時に集合といってもどうせあいつは三十分くらい早く来て、一人でせっせと農作業に勤しんでいるはずだ。文句も言われたくないし、さっさと家を出る事にしよう。

支度を済ませ俺は家を出ていった。

昨日同様、外に俺以外の姿はない。妹もまだ支度を終えていないようで、まだ家から出てきていない。

今日も最初のうちは姫月と二人きりの作業になるのだろう。しかし、今回は重労働であるはずの草むしりも終わっているのですこまで苦ではないはずだ。

しばらく歩いて目的地の畑へと到着する。

案の定姫月もそこにいて、耕された畑を見ながらその場に立っていた。

「おはよう、姫月。今日も随分と早いじゃないか」

その言葉で姫月はようやく俺に気が付いたのか、こちらの方に振り向いた。

妹みたいに姫月も機嫌が悪いんだろうな、とか思ってた気さくに話しかけたつもりだったのだが、姫月は笑顔で俺の事を見つめて挨拶を返してくる。

「イチ、おはよう。そう言うキミも今日は早いじゃない。あたしもついさっき来たばかりだったのに」

ほっと一安心。どうやら妹と違って姫月は寛大な御心をお持ちのようだ。彼女の評価をしっかりと書き換えておかなくては。

「それで、今は一体何をしてる最中なんだ？ これからの作戦でも考え中つてところか？」

「ううん、作戦っていうか一体何したらいいか分かんなくて。昨日イチと九乃ちゃんは畑を耕した後に野菜の種を植えるって言ってたじゃない？ 耕すのはトラクターでやってもらったんだけど、そのまま野菜の種を植えるのは違うような気がして……」

「ふうむ。違うというかどうかという事だ？」

「あたしが昔畑を見た時の記憶なんだけど、野菜がある所に段差みたいなものが出来た気がするの。だから平つべたい所にそのまま植えるのは間違いな気がしてきたの」

なるほど。姫月は農業の知識を全然持っていないと思っていたが、それも多少修正しなくてはいけないようだ。

大正解。野菜の種をただ耕した所に植えるのは間違っている。

「姫月もよく知ってたな。そうさ、野菜の種を植える為にはまだやらなくちゃいけない準備がある。それは『畝立^{うねだて}』だ」
「うねたて……？」

「おうよ。いわば野菜のベッドみたいなもんだ。畑の土をクワとかで細長く盛り上げて、そこに野菜を作るための環境を作る。こいつをしないと水ハケが悪くて、しつかりと野菜が育たないんだ」

「そんな感じだったかも。確かあたしが小さい頃に畑を見た時も、細長い段差の上に野菜が出来てた気がする」

「まあ何処の畑でも同じ事をやってると思うぜ。人によっては黒いビニールを畝の上に敷く『マルチ張り』っていうやつをする場合もあるんだが、あいにく俺達は黒いビニールなんて持ってないしな。とりあえず畝を立てるだけで十分だろ」

まあ畝を立てた後、肥料とかをまいたりする必要もあるのだが、それはまだ黙っておこう。あんまり一度に教えすぎると、姫月も混乱してしまうかもしれないからな。

俺は畑の隅っこに置き去りにしてあったクワを拾い上げる。草むしりは姫月の代わりにやったが、流石に畝立ては話が別だ。クワだって人数分あるし、やり方をレクチャーして姫月にもしっかりやってもらわなくちゃいけない。

「そんじゃやり方教えるぞ。ほら、姫月もクワ持って」
「う、うん。わかった」

そして二人で早速畝立て作業を始めた。

最初は姫月も真似をしながら恐る恐るやっていたのだが、何処かでコツを掴んだのか段々ペースも早くなっていく。

ただただクワで土を盛るだけの作業なのだが、意外と楽しい気がしないでもない。

それは姫月も同じだったようで黙々と作業を続けていた。

「なあ、姫月よ。あんまり長い畝を作る必要もないだろ。昨日野菜

の種をかなりの種類もらっちゃったからな。いくつか畝を分けておいた方がいい気がするんだ」

「そうね、野菜の種類だけ畝を立てた方が後々楽かも」

うむうむ。姫月も少し分かってきたじゃないか。

「んで、肝心の野菜の種は何処にあるんだ？　姫月のカバンの中か？」

「ううん、あたしは持ってないよ。昨日九乃ちゃんが持ったまま帰っちゃったから」

「あー、そういう事が……」

昨日もらったやつは全部妹が持っている。おまけに妹はまだ畑には来ていないし、これじゃあどっいつた構成で畝を立てるのかも決められない。

先走って二つ程作ってしまっているが、まあこれは許容範囲だろう。

「もう予定時刻の六時は過ぎちまってるしなあ。まさかの遅刻か」

二度寝なんてしてないだろうな、あいつ。

「遅刻しちゃうのも仕方ないよ。九乃ちゃんはまだ小さいし、朝の六時に集合だなんて無理も言っちゃったしね」

「まあそれでも……あいつが遅刻なんて滅多にある事じゃないんだけどな」

「ふうん、やっぱり兄妹ね。そんな事まで知ってるんだ」

「ああ、まあ俺が出る時には支度もしてたはずだし、来ないはずはないんだが——」

——ん？ あれ、姫月おかしな事言わなかったか？

「……兄妹って一体何の事だ？」

「え？ 九乃ちゃんとイチの事でしょ」

ちよつと待て……あいつと俺が兄妹である事は内緒だつて、眼力ではあるがちゃんと伝えたはずだ。あいつだってそれに頷いて口裏を合わせてくれたはずなのに……。

「もしかして、あいつバラしたのか？」

「バラしたつていうか、あたしと九乃ちゃんで二人きりになった時、色々教えてくれてね。とってもいい子じゃない。あたしもあんな妹が欲しかったな」

……いや、それはやめておいた方がいい。やはりそうなのだ、あいつは俺にとつての時限爆弾。いつ大爆発を起こしたっておかしくない凶器そのものなのだ。

「……はあ」

大きくため息をつく。

俺と九乃が兄妹である事に対して、姫月が何も疑問を感じていない事。それだけが救いだ。兄妹揃ってここまで農業に詳しいんだなんて、普通だったら家が農業をやっているだと思っはすなんだが、その様子も全くない。俺がこの畑の所有者である事には全く気が付いていないようだ。

「とりあえず、あいつが来るまで作業も進めらんないしな。畝立てで疲れたし、ちよつと一休みしようか」

「うん、それじゃあちよつと休憩しよ」

俺と姫月は道路の歩道側に腰をつき、妹が来るのを待つ事にした。それから数分、何の気もなしに姫月と適当に喋っていると、ようやく妹が到着したようだった。

「おはよう。遅れてごめんよ、みんな」

息を切らして汗をかいているその様子を見る限り、どうやら家からここまで全速力で走ってきたらしい。

「さてはお前二度寝したな？」

「ち、違うよ。ボクもボクなりに色々しくちゃいけない事があったもので！」

妹はそう言い返すが、明らかに目が泳いでいた。間違いない。やっぱ二度寝しちゃったんだな……。

「はあ、とにかくごめんね、姫ちゃん。遅刻しちゃって」「うっん、全然気にしてないから。そんな心配しないで」

姫月はそう言って妹に微笑みかける。

その様子を見ながら、やれやれ……と俺は小さな声でつぶやいた。俺が遅刻しようものなら、姫月は恐ろしい剣幕で怒るだろうに、妹に限ってはそれはない。やはり相手が年下だから、姫月も柔らかい態度で接しようとするのだろうか。

出来れば常日頃、その柔らかい態度を俺にも振りまいてほしいものだが……まあ、それは無理なんだろうな。

「さて……そんなみんな集まった事だし再開しますか。妹よ、ちゃんと昨日の野菜の種セットは持ってきてるんだろうな？」

「うん、大丈夫。ちゃんとカバンの中に入れてきたから」

そう言って妹は通学カバンの中から持ち切れない程の袋を取り出した。

「うっん……それにしてもたくさんあるのね。どれから手を付けたらいいのかな」

姫月はそう言っただけで悩んでいるようだったが、野菜には季節があるので春に育つ野菜を選んだらしい訳だ。

「とりあえず、今はまだ四月だしキャベツとかレタスでいいんじゃないか」

キャベツとレタスの袋を手にとって、俺はさっき立てた畝の方へと視線を移す。

「俺が作った方がキャベツで、姫月が作った方がレタスな。とりあえず場所だけ決めとこうぜ。畝もまだ全然立ててないしな」

これだけあれば春から秋までどの野菜を作ろうが、困る事にはならなさそうだ。

「ねえねえ、イチ。忘れて欲しくないんだけど、ウサギを飼う場所もちゃんと作ってね」

「ああ……そーい、ウサギも飼うんだっけか。考えとくよ」

あれは冗談で言ったつもりだったが、姫月はもう本気らしい。まあウサギを飼うのも良いかもしれない。疲れた時には可愛らしいウサギの姿を見て心を癒してもらおう事にしよう。

「でも、ウサギって大体いくらくらいするのか？ あんまり高いと手が出せないっていうか……その……」

「大丈夫だよ、姫ちゃん。困った時はミイナに頼めば何とかしてくれるから」

「ううん……。でも、そんなにもらってばかりで本当に良いのかなって思っんだよ」

確かに姫月に同感だ。ミイナは優しいし、頼めば何でもしてくれる気がする。しかし、そんな事ではダメなのだ。最低限の事は自分達で何とかしなくてはいけない。

「まあウサギだって、みんなで力を合わせれば買えるさ。とりあえず今は畑作りから始めようぜ、ウサギはその後からでも十分間に合うしな」

俺がそう言うとは何故だか妹はニヤリと笑って「これは結構いい傾向かもね」なんて小さな声で呟いた。

それを聞き逃さなかった俺は直ぐ様「一体何の事だ？」と聞き返すのだが、妹は畑の隅に置いてあるクワを拾い上げ、

「別に」。兄ちゃんの気にする話じゃないよ」

はぐらかすようにそう言っ、俺の立てた畝の横に新しい畝を立て始めた。

黙々と作業を続けるもんだから、追求するのも何だか癢しやくだなとか思い、俺も畝立てを再開する。

姫月もそれを見て作業を再開し、三人で川の字状の畝立てを始めた。

学校に行かなければいけないギリギリの時間まで頑張っ、今ま

で草ぼうぼうだった荒地がようやく畑らしい姿を取り戻していく。

その様子を眺めながらようやく気付く。妹が不敵に微笑んだ理由を理解する。

「……あれ、どうして俺こんなに張り切ってたっけ」

俺の本当の目的を思い出す。姫月の野望を打ち砕くどころか、一体どうして農作業に本格参入してるんだろうか、俺。

最高のシチュエーション、最高のランチ、最悪のタイミング

もう一度、俺のすべき事をまとめておこうと思う。

俺が農作業に巻き込まれたその理由。

まずそもそもの発端は都会から引越してきた姫月二葉、彼女にある。

俺が放置していた畑に目を付けて、ここを立派な畑にしてみせる！
とか言い始めたのが全ての原因だ。

今まで色々な方法を試したが――いや、試したかどうか正直定かじゃないが、とにかく如何なる方法も彼女には通用しなかった。

ならば、一体どうするべきなのか。

そして俺は遂に気が付いたのだ。

それは、

「そもそもどうして姫月が荒地を開拓しようと思いついたのか」

それを突き止める事さえ出来れば、俺だって彼女を止める方法
思いつく事が出来るんじゃないだろうか？

事情聴取、そしてそこから奴を止める方法を考える。

我ながら完璧なプランだ。今までの行き当たりばったりとは違う。

真剣に考えぬいておけば、きっと成功するはずだ――

「――おい、阿賀野。聞いているのか？」

その為にはまず姫月から動機を聞いて、更には妹の協力を仰ぎ、
今までにはないパーフェクトなプランを練らなければいけない――

「――阿賀野！ 先生の話聞いているか！？」

わざわざ授業中にこうやってノートに話をまとめる価値はあった、
これなら、きつとこれなら――

「阿賀野おおおおオオオオ！！」

「……え！？」

教室中に、いや……きつと校内中に鳴り響いたであろう教師の怒
号。

俺はその大声でようやく自分が呼ばれていた事に気が付いた。

「は、はい？ 先生、何でしょう？」

百獣の王に睨まれた小動物のように、俺は小さな声で返事をした。

「授業中だぞ、お前。何をボーっとしてるんだ！？」

お猿さんのように顔を真っ赤にして、怒鳴り散らす我がクラスの
担任。

怒鳴る度に唾液が飛び散り、俺の彼への嫌悪感は最大級だ。

「ああ……。すみません、先生。すっかりボーっとしてました」

「全くお前は……。次に話を聞かずに授業を受けようものなら、生徒指導室に連れ込んで徹底的に教育してやるからな！ 分かったか！？」

「ホントすいません。次からは気をつけます」

謝りながら思う。うちのクラスの担任は大外れだ。

すぐに怒鳴り散らすうえに、気に入らない生徒はとことん潰しにくるスタイルで、学校中の生徒から鬼軍曹なるあだ名まで付けられている。

初っ端の授業態度で俺も目を付けられてしまったせいかな、何かある度に俺へ怒号を浴びせるのだ。

まあ今のは流石に俺もまずかったかもしれないが、そんなに怒鳴らなくたっていいと思う。適当にあしらったフリをしているが、実は心臓バクバクで今にも泣き叫びそうな精神状況にあるのだ。

「……豆腐メンタルなんだから、もつと優しくしろよ」

小声でそう呟いて、俺は先程までまとめていたマル秘ノートを机の中にしまい込む。

ノートの中身がバレなかったただけラッキーなのだろう。これだけは隠密に扱っていかなくてはならない。

そして終礼のチャイムが鳴り響いた。

授業が終わったと同時に俺は机へと力なく突っ伏して、それはもうわざとらしいぐらいのため息をついた。

「……イチ、何やってんの？ あんな大声で叱られて」
「何もやってねえ。ただ単純にボーっとしてただけだ」

授業が終わって早々姫月が話しかけてくる。しかし、思うのだ。
『大丈夫？』の一言くらい言ってくれてもいいんじゃないかと。
昨日もそうだったのだが、こいつは学校に来た途端に態度を変えて、鼻を曲げたみたいに俺へと接してくる。

畑で作業している時はちゃんと会話にだってなるのに、ここに来てからは「ふうん」「そうなんだ」「へえ」「別に」とか、ちゃんと会話を成り立たせる気すらない。

冷たいやつだ。農作業している時以外は、俺の事をダニ虫程度にしか思っていないんだ。

そう思うと余計にテンションが落ちてくる。

何というか寂しかった。もっと可愛らしい笑顔を振りまいてくれたら、俺だってもっと元気になれるだろうし、農作業を抜きにすれば正直な所姫月ともっと仲良くなりたかった。

ああ……駄目だ。考えれば考える程鬱になっていく。

「……もう昼飯買って、さっさと寝る」

俺はそう呟いて、力の出ないまま教室を出ていこうとする。

「ま、待って？」

「何だよ、姫月。俺はお前にとってダニ虫なんだろう？ だから待たない」

待たない。どうせ冷たくされるから待たない。一人寂しく昼飯を食べて一人寂しく机に突っ伏して、俺はこれからの三年間を、一人ぼっちスクールライフを送る事を決めたのだ。もうそれくらい憂鬱なのだ。

「……さっきはごめん。今日の昼休みもちゃんと一人で屋上来てね？　あと、昼ご飯なんて買わなくていいから」

耳元で姫月はそう呟いて、すぐに教室を出ていった。

「また屋上に呼び出しか……」

今日は何をされるのだろう。昼飯を買わなくても良いって、一体何の目的があるのだろう。あいつの考えは良く分からない。おまけに崩れた豆腐メンタルのおかげで頭も若干回らない。

ゾンビのように前かがみになりながら、俺は廊下を突き進む。

昨日のテンションは一体何処に行ってしまったのだろう。

ミイナさえ、ミイナさえいてくれれば、きっとこんな憂鬱な気分も、体全体を取り巻く倦怠感も全て何処かに行ってしまう気がするのに――

「――イチ様。こんにちは、今日もお会いできて嬉しいです」

あまりの考え過ぎで遂には幻覚を見るようになってしまったか、俺。

眼の前には天使の姿をしたミイナが立っていた。

このまま天国へと連れて行ってくれるんじゃないだろうか、もし天国があるならば、そこでミイナと一緒に暮らせればどれだけ幸せなのかと――

「——大丈夫ですか？ お体の調子が悪いのでしょうか？」

心配そうに俺の顔を覗き込むミイナ。何処かの誰かとは違う、彼女は姿も心も正真正銘の天使なのだ。

「もしよろしければ、イチ様の体調が戻られるようにわたしが昼食をご馳走します。屋上に行きましょう、二人きりなら誰かに怪しまれるような事ありません」

そう言っただけで彼女は俺の手を引いた。引つ張られてようやく気付く。現実へと精神が舞い戻ってくるのを感じる。

「……屋上？ 二人きり？」

彼女の言っていた言葉をもう一度脳裏に反響させる。

屋上には俺を呼び出した姫月もいるはずだ。そうならば二人きりで食事なんて出来る訳がない。バックだ！ 人気のない校庭や別の場所を選択する必要がある。

その事実をミイナに伝えようとした。

「……あ、ミイナ。ちょっとバックで——」

俺の言葉を遮るように、風が吹き渡る。目の前には真っ青な青空が広がっている。

ここは屋上だった。意識を取り戻すのが遅すぎたのだ。

「イチ、ようやく来たんだ——って、ミイナさん？」

自分にとって意外な人物が現れた事に、姫月は目を丸くした。

「姫月さん、どうもこんにちは。こんな所でお会いするなんて奇遇ですね」

ミイナはニツコリ笑いながら姫月に挨拶をする。それとは対照的に姫月は不機嫌そうに眉をよせていた。

何とも気まずい雰囲気だった。

理由は分からないが姫月はミイナの事を良くは思っていないようだ。昨日だって姫月はミイナを睨んで、ミイナもそれに応えるように睨み返していた。

こういう時はどうしたらいいのだろうか？ ていうかそもそも原因は何だ？

全く分からん、女の子の思考回路は本当に理解出来ない。

「おかしいな、イチ。あたしはキミに一人で屋上に来てって言ったんだけど」

「そんな約束をしていたのですね。ごめんなさい、姫月さん。わたしとイチ様はこれから昼食を取る予定なのです。申し訳ないのですが、その約束は無しにして頂けますか？」

「で、出来る訳ないじゃない！ あたしだってイチにお昼ご飯食べさせようと思って、しっかりと準備してきたんだから！」

「準備ですか？ それならこちらも済ませてありますよ。調理実習室に天豊院グループ専属のコックを呼び、彼らにとっておきの料理を作ってもらっていますから」

「あ、あたしも朝早くから起きてお昼ごはん作ったから！」

何々なんなの？ もしかして姫月が俺を屋上に呼んだ理由。それって昼ご飯を食べさせてくれるって、そういう意味だったの？

『——あと、昼ご飯なんて買わなくていいから』

ああ、言ってた。確かに昼飯なんて買ってくるなって言ってた。どうして気付かなかった俺……。妹の言うように俺ってば本当にどうしようもない鈍感さんなのか？

「と、とにかく……これ食べてよ、イチ」

姫月はおもむろにカバンの中から弁当箱を取り出した。

な、何だ？ 何で姫月の奴、恥ずかしそうに顔を真っ赤にしているんだ？

「庶民的ですね。イチ様、わたしの用意した料理の方が絶対美味しいですよ」

ミイナは指をパチリと鳴らす。その音を合図に白い縦長の帽子を被ったコック達がそろそろと屋上の中へと入ってきた。それぞれが銀色の蓋を被せた皿を手にとって、その隙間からは美味しそうな匂いが溢れでてくる。

「さあ、イチ様。食べましょう、テーブルと椅子も二人分用意してありますから」

ミイナがまたパチリと指を鳴らすと、筋肉質の男が二人テーブルと椅子を持って現れる。

恐ろしや天豊院の権力。つつか、勝手に調理実習室使って良いのかよ？

「それは大丈夫です。校長の方にもしっかりと話をつけてあります

から」

言いながらミイナはニツコリ笑う。

流石は天豊院義和の一人娘。校長を説得するなど造作もないに違いない。

「ダメだよ、イチ！ キミはあたしとあのベンチでお弁当を食べるんだから！」

そう言っ て姫月は青色のベンチを指差した。

青空の下、屋上にあるベンチで女の子とお弁当を食べる。誰しもが一度は思い浮かぶ最高のシチュエーション…… しかもその弁当は姫月のお手製と来たもんだ……。

「ほら、イチ！ 早く！」

「いいえ、イチ様。椅子に座り優雅な昼食を頂きましょう」

二人からの誘惑。

片方は最高のシチュエーション。

片方は最高の料理。

どちらも捨てがたかった。どちらを選ぶ事も出来ない。こんな究極の選択…… 選べるはずがない。何も決まらないまま時間だけが過ぎていく、

「俺は……俺は……」

必死に考えぬいて、答えを示そう。そう思った時だった。

『——生徒の呼び出しをします。一年三組阿賀野京一くん、至急職員室まで来てください。繰り返します。一年三組阿賀野京一くん——』

—」

「——え？」

鳴り響く校内放送。それを聞いた瞬間に、ピタリと俺の思考回路が止まった。

「あれ、今イチの事呼んでたよね？」

「ですね、イチ様の事を呼んでいましたね」

いやいや、待て待て。今人生を決める究極の選択を強いられているんだ。

そんな呼び出しなんて聞くはずが——

「残念ね、それならお昼ごはんはお預けかな」「残念です、それなら昼食はお預けですね」

残念そうに二人は同じタイミングで同じ言葉を放った。
冷めていく、無尽蔵に膨張していた俺のテンションが、一瞬にしてばんでいく。

俺は力なく項垂れながら、屋上への出口に向かって体を向ける。

「はい……。いつてきます……」

か細い声でそう言って、俺は二つの最高がある屋上を後にした。

みんなが笑顔なら

教師からの呼び出し。

経験のある人間なら、きっと誰しもがいい印象を持つてはいないだろう。

『えゝなにに？ 俺何か悪い事したっけ？』

『宿題出し忘れたの怒られるかな……？』

『やばいよゝ、教室の窓ガラス割ったのバレちまったよゝ』

などなど、とにかく数え切れない程の経験をしてきたはずだ。きつと誰しもがおっかなびっくりに職員室の扉を開くだろう。

しかし、俺は違うのだ。

先ほど上げた判例は全て俺の経験。

判例を見てもらえば分かる通り、俺は今までの学生生活でとあるスキルを会得したのだ。

最初は一体どうして呼び出されているのか分からず困惑し、先生に怒られてからようやく呼び出された内容を知った。

何度も何度も呼び出されるうちに、呼び出される内容が何かを予想出来るようになった。

そして、今……遂に俺は教師の呼び出す声のトーンで、呼び出される内容を確実に把握する事が出来るようになったのだ。

「ふふ……。そして俺が今回呼び出された内容、それは――授業態度だ――！」

誰もいない職員室の扉の前で、かつこ良く決めポーズを取りながら言い放つ。

いや、違う。よく見たら誰かいた、廊下の端っこで見知らぬ女生徒が白い目で俺の事を見る。

なに、たかが女生徒一人に見られた所で痛くも痒くもない。

今俺の目の前に立ち塞がっている災難はもっと強烈なものなのだ。

決意を固めるように深呼吸をして、俺は職員室の扉へと手を伸ばす。

額からは緊張で脂汗がにじみ出る。

相手はあの鬼軍曹、一体どんな怒鳴り方をしてくるのだろうか。

流石の俺でも授業中以外では奴に怒られた事はない。

「失礼します！」

思い切り扉を開き俺は職員室の中へと入っていく。

ピリピリとした鋭い空気、豆腐メンタルの俺では耐えるのだけで精一杯だった。

「……来たか、阿賀野。こっちにこい」

俺が入ってきた事に気付いた鬼軍曹は鋭い眼光を光らせる。

こんなのパワハラだ、職権乱用だ。

教師という立場を利用して、俺という弱い生徒を痛めつけて楽しむつもりなんだ……。

「あの、先生何でしょうか？」

「入学してからのお前の授業態度についてだ。立ちながら聞け」

出たよ、長話になるのに椅子に座らせない行為。えげつない、本当にえげつない。

「入学して僅か三日、僅か三日だぞ？ たかだか三日なのにお前の授業態度は最悪だ。一年の授業を受け持っている教師達からも随分と苦情がきている。分かるか？ たったの三日で職員室に呼ばれる人間なんて前例にないんだよ」

「はい……」

「このままいけばお前は間違いなく停学処分だ、この学校始まって以来最速だろう。入学三日の奴が停学になるなんてな」

そりやすごい。是非とも校内記録更新として賞状を額縁に入れて飾って欲しいものだ。

「だが、俺としては当然自分のクラスの生徒を停学にはさせたくない。分かるか？」

「はい、分かります………すみません、先生」

「出来る限り授業は真面目に受ける。これは最終警告だと思ってくれ。学業に対して真面目な姿勢で授業を受けない奴には当然罰があるんだ。先生もお前の事を庇ってやりたいが、世の中には限度つてものがある」

出たぞ、今度は『庇ってあげてるんだからね！ 勘違いしないでよね！』作戦だ。

あくまで俺はお前の味方なんだと言って、相手を説得させようとする高度な作戦だ。

「本当にすみません、先生。以後は心を入れ替えてしっかりと授業を受けようと思います」

「……うむ、分かればそれでいい。今後は気をつけるんだぞ」

へっ、ちよろいぜ。とりあえず悪びれたフリをして謝る事を謝っておけば文句はそれ以上言えないのだ。

この雰囲気、もうあと少しで解放されるだろう。

俺は早く屋上に戻って、姫月とミイナの昼食を選択しなければいけない。

体がウズウズして止まらない、早く、早く戻って昼食を取りたい

「——ああ、あと一つ要件があつたのだ」

って、おい！ 何だよ、まだあるのかよ！

「お前、どうやら他人の所有地を無断で使っているらしいじゃないか」

「……は？」

なになに？ 話が180度以上変わって何の事だか分かんないんだけど？

「だから、お前が先導して他人の土地を畑として開拓してるという噂を耳にしたのだ」

「他人の土地って……いやいや先生何言ってるんですか。流石に冗談が過ぎますって」

全くあほ臭い噂だ。農業なんて大嫌いなこの俺が、わざわざ他人の所有地を畑にしようだなんてバカげた事する訳ないだろう。姫月

達に手伝わされて、ただでさえ疲労が溜まっているっていうのに。

「まあな、それは先生も思った。阿賀野のような授業態度の悪い人間が、農業などという重労働をするなんて信じられない話だからな」

「いやいや、流石に俺の事を馬鹿にしすぎでしょう。やってますって、現在進行形で農作業に勤しんでいますって。」

「ともかく、他人の所有地を勝手に畑にするだなんて馬鹿げた行為をしてる奴がいたら、そいつは問答無用で停学処分、最悪退学にしてやる。お前がそんな事をするなんてあり得ないと思うが、一応注意はしておくんだぞ」

「は、はい……」

「全く。くだらん噂を流す人間がいるものだ。人を見てから言つて欲しいものだ」

「ホントですよ、俺が善良のある人間だと知っていたら、絶対そんな事言えな——」

「——こんなクズが農作業をする訳がないだろう」

鬼軍曹はそう小さな声で呟いて机の方へと体を向けた。

「阿賀野。もう戻っていいぞ。お前への要件は終了だ」

「……」

俺は無言のまま鬼軍曹に背を向け職員室を後にする。

職員室の扉を閉めた後、俺はわざとらしくくらい大きなため息をついた。

「……どっちがクズだよ」

まさか生徒をクズ呼ばわりする教師がこの世に存在していたとは。この先が心配になる、あんな奴が一年間担任を務めるだなんて反吐が出る。

「……それにしても、他人の所有地を勝手に開拓してるなんて。馬鹿げた連中もいるもんだ」

いつその事、俺の土地もそいつらにくれてやればいいんじゃないだろうか？

そうすれば姫月だって満足するだろうし、俺だって農作業から離れられるんだから満足する。まさに一石二鳥、パーフェクトだ。

しかし、見つかったら即刻停学もしくは退学なんてとんでもないペナルティじゃないか。

俺は当然平和な学校生活を謳歌おつかしたい訳で、そんなリスクの高いような事するはずもない。

噂の連中には申し訳ないが、そんな危険を冒す奴らなんて馬鹿以外にないね。

「さって、お話も終わった事だし屋上に戻りますか」

まだ姫月のお弁当か、ミイナが用意した最高級の料理か、どちらを食べるのが決めていない。昼休みが終わるまでにどちらか一方を選択して、至福の時間を過ごさなくては。

先ほどの憂鬱だった気分も吹き飛んでいく。階段を風のように駆けっていく。

そして思い切り屋上の扉を開き――

「――姫月さん、とても料理がお上手なのですね。この卵焼きふわ

ふわで美味しいです」

「ミイナだって凄いよ。こんなに美味しい昼ご飯なんて生まれて初めて！」

——って、お前ら一体なにしてんの？

「あ、イチ。おかえり、もうお話終わったんだね」

「おかえりなさい、イチ様。ご無事のように何よりです」

二人は筋肉質の男が持ってきた豪華な椅子に座り、テーブルに並べられた昼飯を食べているようだった。

姫月はミイナが用意した最高級の料理を。

ミイナは姫月の作ったお弁当を。

「……え？ 何で……何で食べてんの？」

「それはですね、イチ様には私が用意した料理を最高の状態で食べて頂きたいと思い、今一度シェフの方々に料理を作り直させています。ですので先ほど作った昼食を処分する予定だったのですが、姫月さんが食べてくださるという事に」

「だって勿体無いじゃない。こんなに美味しいのに、ちょっと冷めちゃっただけで捨てるなんて言い出すんだもん。あと、ミイナがあなたのお弁当を食べてるのは、イチがきつと昼休みが終わるまでには帰ってこないと思って。ミイナがあなたのお弁当を食いたいって言うからあげちゃった。ごめんね」

「庶民の味に興味があったのです。冷えていても美味しさを失わない工夫が細部にあり、本当に素晴らしいと思います」

「すごいね、お弁当一つだけでそんな事まで分かっちゃうんだ」

テーブルに向かい合い、それは楽しそうに談笑している二人の姿。

「……なるほどな。俺の昼食が犠牲になって、二人共仲良くなれたって事か」

それならいい。

多分俺が姫月とミイナの内、どちらか一方を選べば二人の仲は更に険悪なものへとなっていただろう。ならばこうして、互いが仲良くなれる要因として使われるなら、それが一番いい事なのだ。

二人の笑顔を見ながら、心の底からそう思う。

「俺も飯買って、今日は教室でのんびりくつろぐか」

売店の売れ残ったパンでも食べながら、疲れた体を癒す事にしよう。

姫月とミイナが会話に集中している隙を狙って、俺は屋上の扉へと手を伸ばす。

楽しそうに笑う二人を残して、俺はその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3534ba/>

Sunny Day Love Farm 『ツンデレ少女と農業をやるハメになった！？』

2012年1月13日01時07分発行